

@makeanovel

viva la vita



目を覚ますと、たちこめる霧の中にいる。

川から這い上がってくるじつとり濡れた、重たい霧だ。

霧に満たされた白い寝室で、塔子はうんざりしている。霧を払いのけようとした手が、むなしく宙をさまよう。

目を覚ました実感よりも先に、いつも霧がそこにあるということにまだ慣れない。ようやく目が覚めたことをはつきり悟った塔子は、手探りで隣に寝ているはずの娘と夫を確かめる。むっちりとした太股、これは〇歳の娘、繭のものだ。その向こうに、夫の拓也のざらっと湿った髭を感じ、塔子は安堵する。

二人から生きていくという体温を感じた。そして自分こそがちゃんと生きていくのだろうかとのひらで頬の両側を包み込むようにする。手の中心に湿った呼気がかかり、それが霧と等しく冷えびえとしていて塔子はぞつとする。

霧に溶け込んでしまったのか、いや、最初からわたしは霧であり、霧でしかないのかもしれないという妄想が最近の塔子の目覚めにはつきまとい、それを断ち切るためにベッドから出るようになる。布団の中でいつまでも、うとうととまどろむことはなくなった。

起きることを決心してからは、すばやく薄手の羽毛布団から抜け出し、パジャマを脱ぎ洋服に着替える。寝室を出てリビングにいき、きちんと豆を挽いて丁寧なコーヒーを淹れることを想像すると、気分はマシになる。

出産とその後の子育ての疲れから頭がぼんやりとしているようだと思っていたが、そもそもなにもかもが蒙昧としはじめたのはここに引っ越してきてからではないのかと近ごろの塔子は疑っている。



「一生に一度の覚悟で購入したはずのマンションに引っ越してきたのよ。もうよその土地に引っ越すこともなく、ここに住み続けるっていう前提で暮らしているはずなの」

先日、塔子は電話で、金沢の実家にいる母親にそんなことを喋った。

「そのわりにここで一生暮らすのだというどっしりとした気持ちがないの。まだ仮住まいみたいな気分。引っ越して半年経つっていうのに」

塔子がしゃべり続けるのを、電話の向こうの母親が聞いているはずだった。しかし塔子が十八歳で東京に進学して以来、一年に一度顔を合わせるかどうかという母親になにか通じあえるものを期待しているわけではない。母親は昔からよく話を聴いてくれる人だった。だから塔子はしゃべりつづけるだけだ。

視界にはまだたっぷりの霧があった。このままずっと目も耳も口もふさがれて、霧に支配されるように生きていくことになるのではないかと不安になる。

霧は、地面の深い場所からゆらゆらと染み出すように放たれている混沌とした「なにか」と塔子は思っている。善でも悪でもなく、ただ、土地の記憶をためこんでいるだけの原始的な存在。創世のときから連綿とここに在った。塔子は気がつくとその存在について、考えるともなしに、頭のなかでイメージだけを幾度も反芻している。

最近ぼんやりしているようだが、以前はもつとしっかりした人間だったのかといえば、塔子は以前の自分について不思議な気持ちでいる。妊娠するまで雑誌の編集をする仕事をしてきた。仕事はそつなくこなしていたと思っっている。しかし、とくに創造的だとも思えない自分がなぜ雑誌を作るという仕事に就きたいと願ったのかすでによくわからないと思っっている。実際にその職を得るためにきつと努力もしたのだろう。他人事のように塔子は自分の過去を振り返る。



NOTICE: This facility may be used only for non-cash banking services. All ATM use subject to police take notice.  
In case of emergency, contact Bank of America Security at 1-800-222-7512.

学生時代は文章教室に通ったり、経験を豊かにしたくて旅行にたくさんでかけていたあの女性。あれが自分だとは。バックパックを背負って世界中を歩き回った、あのジーンズと「シャツ姿」の女性性は、就職の面接でその体験を得々として話したのだろうか。

セーヌ川、ミシシッピ川、テムズ川、長江、メコン川、ガンジス川、ライン川……。塔子は旅先で川があれば、それぞれの川の水を小さな壺に詰めて採集した。ずらっと部屋に並んだ世界中の川の水の壺詰。あの小壺たちはどこにいったのだろうか。うっすらとラムネの色をした壺に、すきとおった水がまつた小壺たちは……。

あれからいくつかのまとまった時間が過ぎて、塔子は川べりに建つマンションの十九階に棲んでいた。十九という数字はどこか不安定な印象がすると塔子は考えている。できれば偶数階が良かった。でも偶数の階に、棲みたいと思う間取りがなかったり、あってもすでに売れてしまっていた。結局十九階のその物件の間取りと価格が理想に思えたので決定したが、その十九という数字がぐらぐらとやじろべえのように揺れ続けている気がしてならない。

川べりというより、部屋は川の上にせり出して、流れの上にぽっかりと浮いているようだった。実際、窓からの眺めはそんなふうなのだ。川とマンションの間には草に覆われた土手があるのだが、リビングの窓からそれは視界に入らず、じかに川が見える。

こんな川のそばぎりぎりの土地にマンションを建てるなんて水害は大丈夫なのかという心配はあった。しかし、スーパー堤防というもののおかげで、百年に一度あるかないかのレベルの雨でも降らない限り大丈夫なのだそう。もちろん百年に一度の大雨は明日にもやってくるかもしれない。従来の堤防では、水が堤防の上を乗り越えなくても地下の部分で決壊することがあった。スーパー堤防は、それを防ぐために堤防の幅をとて広くしてあるのだそう。その広い堤防の幅の中にマン



ションも建っている。堤防と建物は一体化しているようなものだ。万が一、百年に一度の大雨によってスーパー堤防が決壊したら、上に建っているマンションごと川の濁流に崩れ落ちるのだろうか。塔子はその場面を想像することがある。いざそのときがきたら、必死に助かろうとするだろう。でも結局、到底自分の力の及ばないことに必死に抵抗することの困難さに打ちひしがれ、無力感におそわれてそこでそのイメージはストップするのだ。

川面からたちのぼる水蒸気をそのまま呼吸できるくらい近いと期待していたら、それどころか川は白く姿を変えて、毎朝寝室に侵入してくる。必ず早朝の時間にあふれるように、ほとばしりであるように川は白い煙を放った。

毎朝、寝室は濃霧だった。

いつも朝食とお弁当の準備がすっかりできあがった頃に目を覚ます拓也にそう話しても信じてくれない。地上十九階のこの部屋まで霧が這って上ってくるわけではないというのだ。

「わたしだって最初は信じられなかったわよ。疑うのならその時間に起きて見てみればいいのに」と言うと、そこまですて確かめたくもないと拓也は言う。確かに夫にはそれほど重要なことではないと思えたのでその話をそれからすることははない。

だからこの川の霧に満たされた時間のことは塔子だけが知っている。このマンションに住むほかの住人たちが知っているのかどうかは確かめたことはない。

1

着替えて寝室からリビングに移動した塔子は、ソファアームに腰掛けてコーヒーを飲んでる。白く濁った空間が大きな六枚のガラス窓の外、屏風のように連なる。



ひょうびようと雲が棚引くようなその風景は、仙界とでも呼ぶべきものだ。と塔子は思う。ほとんど放心して、窓の外を眺めていた。

自分の家を手に入れたら、ここからの眺望や最新の設備の揃うキッチンなどを誰かに自慢したいような誇らしい気持ちになると思っていた。しかし畏れのような気持ちをもてあましたまま、塔子は引越しハガキすら出していなかった。

今の時間こそ人の世界から遠く隔たったように静かだが、三本の路線が乗り入れる巨大な駅からそれほど離れていなかった。駅の周辺は歓楽街やショッピングセンターがひしめいている。

友達に「新しい家に引っ越したの。ぜひ遊びに来てね」と、電話をかける代わりに、気がつく。塔子は母に電話をかけていた。

返事をなにか期待しているわけでもなく。

窓からの眺望が素晴らしいという謳い文句の高層マンションが世界に一体どのくらい存在するのか知らないが、その部屋に住む者たちはそこで生活を本当に楽しんでいるのだろうか。塔子はマグカップを持ったまま窓に近づく。

霧の粒子が見えそうなくらい顔を窓ガラスに近づける。ほんとうに全くなにも見えない。

近頃ではウォーター・フロントとかリバー・ビューと呼ばれ、水際の生活がさもおしゃれで洗練されたライフスタイルに一役買うようなイメージが定着しつつあるが、もともと川の近くというのは、それほどイメージのよい場所ではないのではなかったか。昔から捨て子は川の橋の下に棄てられると決まっていたし、今だって川沿いにはブルーシートの家が連なっているのだ。川沿いが開発されるたびに、ブルーシートで作られた小屋は目立たないように移動しながらも、しかし川沿いからは離れていかない。



そういえば三途の川というものがある。あの世への継ぎ目もまた川なのだ。

塔子はここに引越してきた日のことを思い出した。

「ねえ、ニューヨークの中心部、マンハッタンって小さな島みたいな場所なのよね。そして長細いその土地の両側を川が分断しているのよね」

引越しの荷物が山積みの部屋で、塔子は拓也に向かってそう喋りかけた。

新築のこの部屋の引渡しの日、引越してきた。マンションの周りには他にも引越し業者のトラックが沢山停まっていたが、部屋の中は静けさにみちていた。

二月の凍えるような雨が降っていた。まだエアコンのとりつけ工事が済んでない部屋は寒くて、ふたりともダウンのコートを着込んでいる。生まれたばかりの繭もおくるみに包んで、さらに分厚い毛布をかけてあった。

素晴らしいはずのパノラマ眺望は、厚い雨のカーテンの向こうに隠されている。暗い色の雨雲が空の低い位置にあり、空間は圧迫されるように狭く感じられる。そしてなにより川風の音が凄まじかった。獣の吼えるような音が不吉に響き渡る。

引越し先ですぐにコーヒーを飲めるようにと、コーヒー豆や紙のフィルター、ケトルやカップなどをひとまとめにしておいた。それでちゃんとしたコーヒーを淹れた。

「川の向こう、例えばブルックリンに棲む人間はいつか川の向こうのマンハッタンに棲むことを夢見ている。逆にマンハッタンに棲むことができなくなると、川の対岸に棲むことになったら落ちぶれてしまったと見なされるのよね」

塔子はコーヒーをカップについて拓也に手渡した。ビスコッティも箱に詰めてあったのでそれもペーパーナプキンの上に置く。

「最近はブルックリンがむしろオシャレで、広いスタジオを兼ねた家を求めてわざわざクリエイター達がマンハッタンを出てこぞってブルックリンに集まっているっていう記事を読んだよ」

拓也がコーヒーを啜りながらイタズラっぽく言う。

「ええ、最近そういう流行があるみたいね。でも続きを聞いてよ。あくまでそれは流行だし、やっぱりマンハッタンはマンハッタンなんだと思う。そしてトーキョーもやっぱりトーキョーで、厳然とした境目がある。今、目の前を流れる川がそれなのよ。東京都とこっちの県の境界線がこの川なのよ。わたしも対岸の成功の土地マンハッタンならぬ、トーキョー・シティに憧れて、この窓から毎日眺めて暮らしていくことになるのかなあって思ったの」

塔子はビスコッティをコーヒーに浸して食べる。それは拓也のやり方を真似たのだ。彼は幼い頃にヨーロッパで暮らしたことがある。ビスコッティをコーヒーにひたすのがそのときの名残なのかどうか尋ねたことはなかったが、なんとなく、夫がヨーロッパで暮らしていたという事実が気に入っている。そもそも地方で生まれ育った塔子は、都会や都会的なものに憧れて生きてきた。十八歳のとき進学するのにトーキョーに出るという選択肢以外考えられなかった。

「女性はそういう俗っぽい話が好きだよ。ステイタスとか、権力とか、案外男はそんなものに無頓着なものだよ」

拓也は食べたり飲んだり忙しくやりながらも器用に綺麗に喋った。羽目を外しても決して下品にはならない。やんちゃなところが無いわけではないけれど、本当に危険な場所には決して近づかない。

そして、拓也はお菓子が好きだった。お酒も飲むが、甘いもののほうが好きだと公言している。塔子にとってお菓子の好きな男性は育ちが良い証拠だということになっている。お茶とお菓子の時



間があり、それも母親の手製のお菓子が饗される家庭で育った証だった。お酒しか飲まないという、いかにも荒っぽい印象の男性を塔子は好まない。

甘いものに目がないという男性に会うと、甘いものに目がない男性に目がないと、思わずこたえてしまいそうなくらい、塔子は甘いものを好きな男性に好感を持って生きてきた。育ちの良さも塔子の憧れるものの一つだったからだ。

お金は自分で努力すればいくらでも稼げる。しかし、育ちの良さは自分には手に入れることのできないものだ。と塔子は感じていた。だったらせめて、そばにいる人間にはそうであってほしいという思いがあった。

「俗っぽくて結構よ。でもそういう俗っぽい階層の差を、川っていうのが明瞭な線としてくつきりと分断しているのが面白いと思ったのよ。その価値観をニューヨークが舞台の映画かなにかで知ったとき、まさか自分がまさに同じような設定で川のそばに暮らすことになるなんて思ってもみなかった。そのことがなんだか面白いのよ」

「我々はトーキョー・シテイには住めなくて、恨めしそうに対岸を眺めて暮らすってことか」  
拓也は楽しそうに言う。

「そういうことよ」

塔子もそれに調子を合わせて弾んだ声で返事をした。

部屋はまだガランとしていたけれど。

夫との楽しいお喋り。おいしいお菓子とコーヒー。そして生まれたばかりの小さな娘はベビーベッドの中ですやすやと眠っている。

あのときの塔子は確かに幸せで満ち足りていた。ここに引越してきたあのこごえる風の吹き荒

れる雨の日に、強くそう思ったことを、ぼんやりと思い出す。

今朝もしんしんとした霧に隠されて、首都トーキョーはその全容を明らかにしはしない。今は見えないが、悠々とそこに川が横たわっているはずだった。

川はトーキョーとこちらがわ、一体どっちのものなのか。水面ににトーキョーとこちらがわを分断するためのもう一本の明瞭な境界線が存在する、ということは今のところない。

川は誰のものでもない場所なのだろう。だから昔から行き場所のない人間の流れてくる場所でもあった。

わたしはどうなのだろう、と塔子は思う。この場所を自ら選んでやってきたということになっているが、本当にそうだろうか。

マンションある土手の対岸には、広々とした河川敷が広がっている。

緑の芝生はよく手入れされているし、野球場やサッカー場が整然と区画されていて、休みの日には大勢の人間がそこでスポーツに精を出している。

そして、その河川敷の一番川のきわを、小屋たちが縁取るようにして並んでいた。

ブルーシートでできたそれらの小さな家は、傾いたりすることもなく案外しつかりと建っている。ブルーシートだけでなく、頑丈そうな建材を利用している家もある。窓やドアがついていたりもする。

トーキョーに棲むためには、乞食になるも厭わない人間が存在して、彼らは今、ひととき、かりそめの姿である川沿いに暮らしているのだ、と塔子は時々想像する。

彼らは、トーキョーでの熾烈な人生に疲れて、ひととき、あの場所で仙人のような暮らしをしている隠遁者たちなのだ。





このマンションのモデルルームに初めて足を運んだとき、販売担当の男が拓也に言った。

「奥様にはブルーシートの方たちのことをご説明されていますか」

拓也はとっさになんと返事をしてよいのかわからない表情をしていた。

塔子はかつて、「ブルーシート」という言葉を知らなかった。正確に説明すると、ブルーシートと言われると、屋外で敷物にしたり、なにかのカバーに使う大きな青のビニールのシートのことを思い浮かべることはできた。そういう青のシートはごくありふれたものだったし当然塔子も知っている。

しかし、そのとき担当員が使ったようなニュアンスのブルーシートという言葉がどういう意味を持つのかを知らなかった。進学に際して上京して、初めて路上生活者の存在を知るまでは。

いや、路上生活者というものがこの世に存在することは知っていたが、彼らがそのブルーシートを使って雨露をしのぐ小屋を造ったりして、だからそういう小屋のことを「ブルーシート」と呼ぶというような、いわば隠語として使われていることを知らなかったのだ。

塔子が初めて路上生活者を見たのは小学生のとき、家族で京都旅行に行った先でのことだ。

京都の街の中を歩いているとき、アスファルトの道路に一人の男性が座り込んで、火を熾してフライパンでなにかを焼いているのを塔子は見た。道でフライパンを使うなんて初めて見る、と目が離せなくて、じっとそれを見ていた。フライパンの中には、緑色に濁ったものが入っていて、それがぐずぐずと溶けていく。目が離せなかった。ずっと見ていたかったけれど、同時に見てはいけないものであるような予感が酸っぱいような緊張となって塔子を襲った。そこにいたいのと、離れなくてはいく力が拮抗して、ほとんど動けなくなっている塔子の腕を、誰か大人がぐいっとひっぱって、やっとなんと動くことができた。

今の人、なあに？

一緒にいた家族にそういうことを聞いた覚えはない。たぶん聞かなかったと思う、と塔子はそのときの思い出を反芻する。

そのまま思い出は古ぼけていって、それから全く路上生活者の姿を見ることがないまま十八歳まで故郷の街で育った。

そして十八歳で、都内の大学に進学する。東京には路上生活者がたくさん存在した。上京したばかりの頃は彼らの姿を見ると落ち着かない気持ちになった。でも、やがてトーキョーの街には、路上生活者でなくても、ドロドロに汚い格好をしたくたびれ果てたような人間が溢れかえっているところにも気づいた。彼らはふつうに電車に乗っていたし、道もふつうに歩いていて、おそろくどこかにアパートなどを借りて棲んでいるし、仕事も持っている。だから路上生活者だけが特に目立つこともなく東京には紛れ込んでいて、塔子は徐々にその存在を特異なものとして意識することもなくなった。

もともと都会に憧れて上京し、学生時代から出版社でアルバイトをして、就職もその出版社にした塔子は、清潔で上品な人々がたくさん棲むエリアにばかりいたとも言える。オフィス街にも浮浪者はいるにはいたが都会の風景に彼らは妙になじんでしまっていた。独身時代に棲んだアパートも落ち着いた住宅街にあったので、浮浪者はほとんど見かけなくなった。

しかし、結婚して新しい生活をするために移り住んだ街には、路上生活者がたくさん存在した。それまでも見慣れていたはずだし、それにそういう環境にも慣れてしまおうと思っていた。

でも実際に暮らしはじめると、やたら目に付くし、その人々がとても気になる。汚いものだと思っているわけでもなく、街にいてほしくないという不満を持っているわけでもない。しかし存在感は



日増しに強くなってゆく。

彼らを見無視することはほとんど不可能になり、常に彼らがいるのだと意識して暮らしている。それがどういうものに由来するのかよくわからないが、とても気になるのだ。

それまで棲んできた街には、仕事を終えて、また飲み会や食事を終えて、帰宅して眠るために帰るアパートがあっただけだった。でも今、塔子はこの街に、生活者として暮らしている。そのせいなのだろうか、と塔子は納得するようにしていた。

コーヒーを飲み終えて塔子はキッチンに立つ。それからおよそ一時間、ほとんど休みなしに料理を続ける。

鶏肉はレモンとバジルでソテーして、マッシュしたかぼちややクランベリーと胡桃をまぜてサラダにする。赤いラディッシュと白い蕪を交互に串に刺してそれにはサーデインのディップを添える。アルミのカップに卵を割りおとしてスチーム・オーブンで目玉焼きにした。レタスのグリーンを生かしてそれらをお弁当箱に詰める。

六時に焼きあがるようにタイマーをかけておいたホームベーカリーからよい匂いがはじめて、やがて終了のブザーが鳴る。すぐに焼きあがったパンを取り出して、網の上で冷ます。今日はライ麦のパンを焼いた。今日のライ麦の配合は四十パーセント。薄くカットして、オイルで拭いて手入れをしているので艶のあるオリブウッドのカッティング・ボードの上に並べる。

ブルー・チーズとカマンベールチーズを薄く切ってそれをパンのそばに添えた。  
食卓にランチョンマットを二枚敷いて、皿も並べてゆく。

冷蔵庫の中にあるジャムをすべて（こけももとあんず、ブルーベリーと、グアバだ。ルビーの色

とオレンジ色、濃紺、淡いピンクが並んで美しい、と塔子は思う。並べて、あとはクリームチーズとバターケースも並べる。バターナイフをあるだけ全部、スプーンもたくさん並べ、そして箸も箸置きに置く。

ガラスのピッチャーに入っているアイス・コーヒーと、ミルクの入った小さな容器も並べる。そして夫を起こしに寝室へ戻る。

六時にタイマーで鳴るようにしているラジオの音が溢れるなかで、拓也は気持ちよさそうに寝ている。隣で娘もぐっすり眠っている。

塔子は低い声で囁く。

「ねえ、起きて。朝ご飯の準備ができたのよ」

ちようど六時半だ。拓也の携帯電話のアラームも鳴り始める。一気に寝室がにぎやかになる。

この頃には、家じゅうに充滿していたあの霧はすっかり消えている。どこへ消えてしまうのだろうかと塔子は不思議に思っている。でも霧の行方を知る方法はない。

「やあ、おはよう」

目を覚ました拓也がにっこり笑う。

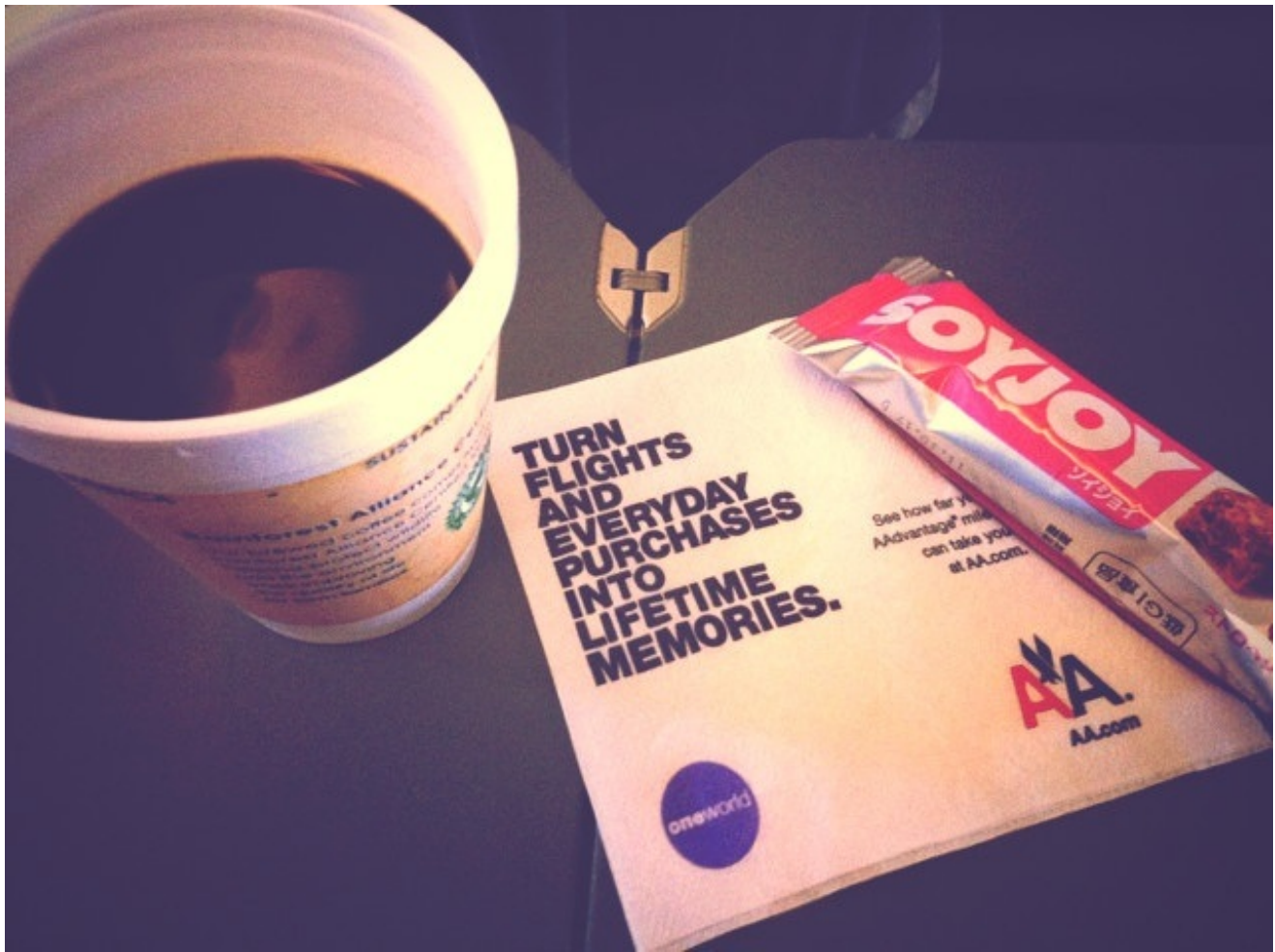
朝がやってきた。マイ・ホームに。

賑やかな食卓に塔子と拓也は仲良く並んで座るだろう。

ベビーチェアに座った娘もにこと離乳食を食べるだろう。

ラジオからも軽快な音楽が流れ続け、パーソナリティも朝を鼓舞するようなセリフを次々にくりだしてゆく。

「トーキョーに朝がやってきましたよ。もうすぐ八月ですね。そろそろ夏休みを取るといリスナー



**TURN  
FLIGHTS  
AND  
EVERYDAY  
PURCHASES  
INTO  
LIFETIME  
MEMORIES.**

See how far your  
AA-Advantage® miles  
can take you  
at AA.com.



の方も多いのではないでしょうか。ふるさとに帰省する人、海外旅行に出かける人、トーキョーに残る人、様々かと思えます。そんなあなたの夏休みの計画をぜひお便りしてください……」

ラジオの声が軽快に続く。

トーキョーに棲むたくさんの人間が聴いているであろうこの朝の番組を、朝の食卓で聴く。

「うちはほんとはトーキョーじゃないけどね」

パンにジャムを塗りながら塔子は思わず呟いた。

「君はまだマンハッタンの側に棲めないことを惨めに思っているのかい。しょせん僕はサラリーマンだからね。向こう岸に住む連中のほとんどは、われわれサラリーマンを、雀の涙ほどの給金でこき使って莫大な富を得たやつらばかりさ。魂まで売ってしまわないとあちらには棲めない」

コーヒーカップを持ったまま拓也は楽しげにそう言った。拓也はサラリーマンである自分をさほど惨めだと考えているわけではないことを塔子は知っている。サラリーマンは確かにこき使われているのかも知れないが、彼はだいたいぶマシンな部類だ。サラリーマンとはよくいったもので、サラリーをもらって生きているわけだが、そのサラリーは夫の場合、平均をはるかに上回っている。だから、拓也はそれほど経営者に搾取されているという気持ちを強く持っているわけではない。おもしろがつてあんなことを言っているだけだ。

「都心から電波に乗ってラジオ番組は、川でできた県境なんてひよいっと越えてここまで届くのよねえ。県境どころか、ずいぶん辺鄙な場所も含めて関東一円に届いているし、インターネット配信で聴けば、もしかすると世界中どこからでも聴けるのかもしれない。でも、でもよ。番組の放つ、都心の洗練された雰囲気、本当に享受している人間は、いったいどれくらいいるのかしらね」

塔子は続けて喋る。

「本当の意味で洗練された人間が、都会的な雰囲気をもとうものなのかどうか、僕には疑わしいし、そもそも都会的というのはなにを指すのかな」

そんなふうに夫は茶化す。夫こそ、その都心で青春時代を過ごした人間だ。

実家は都心にほど近い高級住宅街にあり、中高一貫校から大学まで東京の中心部の辺りで過ごして、今も都心の会社に勤めている。

だから自分は県境のこの街ではなくて都心が本拠地という感覚でいるのかもしれない。

塔子はラジオを聴いていると、東京との境の街でトーキョーを近いような遠いような位置に眺めながら暮らす主婦が、ハイセンスで都会的な生活を送りたいと願っているという設定のカリカチュアに自分が描かれているような気分になることがあった。

「あいにくお日様は見えない天気ですが、今日もみなさん、すてきな一日を！」

パーソナリティが高らかに告げ、人気のあるイギリス人のバンドの歌う曲が流れ始めた。軽快な音楽だが、歌っている歌詞は壮大とも言える。塔子はその歌を気に入っていて、歌詞の日本語訳を調べて読んで、ほとんど覚えていた。

わたしはかつて世界を支配していた

わたしの言葉で海は割れた

今は朝起きてもひとり

かつて支配したこの地を掃く

トーキョーが賑やかに朝を迎える。





拓也は朝ご飯を食べながら、携帯端末を使って新聞を読みはじめる。

塔子は繭に離乳食のつぶした粥を食べさせる。食べさせながら、自分もコーヒーを飲む。もう一度窓の外を眺める。うすぼんやり曇った空。

そして、塔子はふいに気がついてしまう。

ブルーシートの小屋に棲む人々もまた、このラジオを聴いているに違いない。

このすこし甘ったるい、鼻にかかったような歌声を聞きながら、ガスボンベを使って沸かしたお湯で、インスタントコーヒーの粉を溶かす。小屋はいい香りでいっぱいになる。

男はカップを持ったまま、小屋の外に出てみる。風もなく湿度は相変わらず高いが、こうやって川を見渡すとところが晴れる。

すがすがしいといってもよい気分だ。今日もまた仕事にでかける必要はない。満員電車に詰め込まれて殺人的な量の仕事をこなすために運ばれることはない。

男は満足そうな表情で川を見ていた。

コーヒーを飲みながら、ずっとそこに立っている。川べりの生活を一番楽しんでいるのは、まさにこの男なのだった。

ふと塔子はそれが妄想でないことに気がついた。

対岸の川岸には、本当に男が立っていた。そして飲み物を飲みながら川を見ていた。なにを飲んでいるのかまでは見えないが、確かに手にはマグカップのようなものを持ってそれを口に運んでいた。

「ねえ、あの人を見て」

塔子は拓也に声をかける。

「ん？」

促された拓也は、首を伸ばすようにして窓の外を見た。

「川を見ながら、あの人、なにか飲んでる」

「ほんとだね」

拓也はそう返事をして、すぐに興味を失ったみたいで今度は首をすくめるようにすると新聞に目を落とした。

拓哉はあの人々に対してはいつもほとんどコメントしない。誹ることも褒めることも、彼らに対する意見を述べることも自体がタブーであるかのように、周到に避けているような気がする、と塔子は思った。

無関心というポーズを取りながら、近づかないように注意を払っているのだ。

塔子のほうは、目を離せなかった。

あの男性は、川を見ながら、飲み物を飲んで、いったいどんなことを考えているのだろう。ブルーシートで造られた粗末な小屋の前に立っている男の顔は、奇妙に晴ればれとしている印象がする。着ているものはこざっぱりとしている。毎日川の水を使って洗濯をしているのかもしれない。

男の、意外なほど精悍な気配がなまましく伝わってくる。

この街に引越してきた頃、彼らからは乾いた紙のような気配しか感じなかった。しかし、少しずつ、彼らに体温があったり、呼吸があったりするようになっていた。

わたしはかつて世界を支配していた

わたしの言葉で海は割れた



今は朝起きてもひとり

かつて支配したこの地を掃く

イギリス人バンドの歌が響く。部屋にも鳴り響いているし、小屋の中からも漏れ出て、響いている。そして塔子と男性の間に横たわるこの大河の上にもこの歌は響いているのだろうか。

塔子はこのバンドが実際に演奏している映像を見たことがあった。

シンセサイザーが使われていると思えば、古風な太鼓や鉦を大きな撥で叩いている奏者もいて、それらが渾然となって豊穡な旋律を奏でている。

生命の美しさを讃えるというタイトルのその歌が、ごく当たり前の風貌をした英国人の男性によって歌われていた。

そして、なぜだろう？

その、男性ボーカルと、川岸に立っている男のイメージが重なりあう。塔子の中で。

この歌を対岸である男性は聞いている、まったく同時に聞いている。コーヒーを飲みながら、あの男は聞いているはずだ。

いや、あの歌を歌っているが、あの男なのではないのかというくらい、ボーカルと川岸の男のなにかが重なりあう。重なり合ったものが、神聖なものを帯びていると気づいて、塔子は胸がしめつけられるようだ。

川岸に立っている男は、ほとんど、神聖ですらあるのだ。

重い湿気に押しつぶされるように夕方までを過ごして、塔子はようやく外出する気になる。やむことを期待していた雨は、間断なく降り続けている。降っているというよりはもやもやと一日中雨粒は空気中を漂いつづけ、すべてのものを濡らしているようだった。

ベビーカーに子どもを乗せて駅の辺りまで行って帰るのはほどよい運動になるし、天気さえよければ毎日でもそうしたいと塔子は考えている。しかし雨の中、ベビーカーをおして歩くのは大変だった。その日は、とうとう歩いていくことは諦めてバスに乗る決心がついたのが夕方近くになってからだった。

娘を抱っこ紐に入れ、最小限の荷物を持ってバスに乗る。マンションの目の前にバス停があり、川の土手沿いの道をバスが駅まで運んでくれた。駅に近づくまでの道にはずらりと同じようなタワーマンションが建ち並ぶ。駅に近い場所から順番に建っていった、塔子の引越してきたマンションはいまのところ土手沿いに並ぶ物件の中では一番新しい。

徒歩で駅までは十五分だ。これから先もこの土手沿いにマンションが建つとすると、どんどん駅から遠ざかることになる。駅から遠くなるとマンションとしての資産価値が下がることになる。

でも塔子たちが買ったマンションはこの付近の川沿いのマンション群の中では一番高い値段がついた。もちろん駅の周辺にはもっと高額なタワーマンションがいくつも建ちはじめている。それでも煩雑な駅前を避けて川の見える少しゆったりとした環境を求める人間も多いらしい。マンションバブルが弾けて売れ残る物件が増えているという話も聞くが、塔子のマンションは完売したことを住人たちが誇らしげに口にしているのを耳に挟む。

田舎のがつしりとした一軒家で生まれ育った塔子は、土地を所有するわけでもなく、空中に浮かぶ箱のような住居にそのような値段がついて上がったたり下がったりすることに対して、心の底から



信頼を置くことはできない。

そのことを口にする、拓也は「土地や建物にお金を払うという概念ではなくて、この場所に棲んだら手に入る生活スタイルに対してお金を払っているんだよね」ともっともらしいことを口にした。

バスの中はむっとする空気、息が詰まりそうだった。冷房が弱く利いているが、湿度が高く、ねばついた空気が充満している。濡れた傘にふれないように乗客みんなが体をくねらせて、こわばった表情をしていた。

塔子も身体を硬くして息を止めるようにして駅に着くのを待っていた。

やがて到着した終点の駅で降りようとしたとき、塔子の目の前で降車した女性がそのまた前の女性を小突いた。

「ちよっと、なにすんのよ！」

鋭い叫び声をあげて振り向いた女性は塔子と同年代、三十代の半ばにさしかかろうかという年代だった。毛玉の目立つジャージーの洋服はだらしなく伸びきっている。金に染めた髪の毛の根本は五センチくらい染めていない黒い髪が生えてきていて、こういう髪の状態を「プリン」みたいだと呼ぶのではなかったかと塔子はそんなことを考えた。そして塔子の側から顔は見えないが、小突いたほうの女性もまた同じ世代だと思われ、面白いことにまったく同じプリンの髪をしていた。小突いたほうと小突かれたほうは、お笑い芸人の相方同士のように、同じような格好をしている。そんな二人がたまたま喧嘩になったのだろうか。二人はたまたま一緒に乗り合わせた人間というより互いの連れに思えた。

振り向いたほうは腕で押し退けるように相手を押した。塔子は身体をねじって二人をすりぬけな



がらバスを降りた。

「おい、お前の方が最初にぶつかってきたんだよ」

怒気を含んだ声で、最初に小突いたほうがまたやり返した。

女性二人は傘も差さず、小突きあいながらバスを離れていく。

「なんだよ、てめえ、やるのかよ」

怒声が響き、ついに取っ組み合いの喧嘩になる。

それを見て塔子は呆然とする。女性同士の、身体を使った喧嘩というのは初めて見た。

とつさに止めに入らなくてはと、二人に近づこうとしたが、はっと娘の存在を思い出す。抱っこされている繭は、塔子の胸の位置ですやすやと眠っていた。もし娘になにか危害が加えられたら、と思うと足がすくむ。でもその場を離れることもできず二人を見る。

駅のそばの工事現場にいた、警備員の制服を着た初老の男性がとめに入ろうと二人に近づいていく。

二人はますます激しくもみあっている。はじめに小突いたほうが胸ぐらをつかむと、もう一方が平手打ちをして、されたほうはその腕をつかんで噛みついた。「ぎゃあ」という声があがり、腕から血が滴り落ちる。それでも腕に噛みついたまま離れようとしないう女性の間口が赤く染まっている。かじられたほうが相手の髪をひっぱりあげる。止めにはいった男性はふたりの肩を両手でつかんで引き離そうとしているが、びくともしない。

そのとき太い男性の声とホイッスルが響く。警官らしき制服を着た男性が三人こっちへ向かって駆けてくる。駅前のロータリーには交番があつて、そもそもそこからここは丸見えなはずだと塔子は今更気がつく。





「やめなさい」

中年の強面の警官が叱りつけるような声をあげて、二人の若い警官がそれぞれ女性を羽交い締めにして引き離した。

「ばっかやろう。なにすんだよ」

女性も野太い声を絞り出すように出す。腕をつかまれているが、足をばたつかせて敵に最後の一撃をくらわせようとしている。

それでもどうにもならないとわかり、片方がもう一方に向かってぺつと唾を吐きかける。それを知ったもう片方が同じように唾を吐きだした。

さきほど止めに入った警備員の男性はあきれかえったように両手を持ち上げて「やれやれ」といった仕草をした。

バスを降りて同じように近くにいた乗客が、

「いやあねえ。このあたりってあんなふうにはガラスの悪いのがあるのよねえ。しかもあの人たちって女性でしょう。信じられないわ」

と囁いているのが聞こえた。バスは川沿いを走り、そこに棲む人を順番に乗せて人を運んでくるが、川沿いの新しいマンションの内側には古くからの住宅街やアパート群がある。

だからその言葉は、最近新しいマンションに引っ越してきた人間のものであるはずだ。新しく来た人間が、この街のことをそんなふうにするのを時々聞くことがあった。

一方塔子のほうは、その同じような年齢の女性の壮絶ともいえる乱闘シーンを、奇妙な親しみをもって眺めていた。

塔子は会社員時代からの習慣で、きちんとお化粧をしていた。ティファニーの結婚指輪をして、

腕にはエルメスの時計を巻いていた。上品に見えるだろうと選んだココア色のワンピースに藤色のニットを羽織っている。最近時間がなくて髪は染めたりパーマをしていないが、ブラッシングをしっかりとっているので艶があり、タイトなシニヨンにまとめていた。もしかするとわたしはとても上品な「奥様」に見えるかもしれない、と塔子は考える。

でも、これは全部演技だという気がしていた。新しいマンシヨン群に棲む人間という役割を演じるための衣装を身にまとっているだけだ。

本当のわたしは、あそこで取っ組み合いの喧嘩をしている女性なのではないのか。相手をつかんで、力の限り殴る。ひっかく。蹴つとばす。相手が憎いというよりも、思い通りにならないすべての対象が憎い。そいつらすべてをはずたずたに引き裂いてやりたい。何度でも何度でも突き刺してやるんだ。こっちの手が破壊されてしまうくらいに力を込めて全部を殴り倒したい。それで自分のほうが壊れてしまっても本望だという気がするし、そんなふうには自滅するしか生きる道はないのではないか。塔子はそういう考えがふつふつと湧いてくるのを止められない。

激しく渦巻く憎しみにこびり付くべつとりと重いヘドロみたいなものを確かに一番深い場所で知っている。そういうものをすっかり忘れて、涼しい顔をしているが、あの女性たちのことがとてもよく分るような気がすると塔子は思い、首を振る。

同じマンシヨンに棲む上品な奥さんたちよりも、喧嘩していた彼女たちのほうがよくわかるというのはどういうことだろう。

なにかひとつかけ違えたら、今、こんなふうには上品な洋服を着ていない。運命によってあらがいがたく人生とは定められたものだとしても、しかし一瞬一瞬の判断を、ちよつとでも誤ると運命は大きく違っていたかもしれない。運が良かったのでたまたま今はそれほど悪くないポジションにい



る。でも、ほんの一センチどこかでなにかがずれていたら、喧嘩をしていた女性はわたしであるはずだ。

ずきずきとこめかみが痛むような気がして手で押さえた。

こんなふうにはひどく混乱するのも、最近よくあることだ。

妊娠して体調を崩したときに、長年勤めてきた会社が休職扱いにすることを認めず、ほとんど無理矢理退職させられたことが尾を引いているのだろうか。塔子は訝しむ。くやしいとは思ったが、望んでいた妊娠をして幸福だったせいで、当時あまり深刻に悩むこともなかった。会社から必要とされてなくても、母親としてやっていくことがたくさんあると思えたのかもしれない。しかし徐々にそのころのわだかまりがあらわれはじめているのだろうか。塔子はしばらくそこから動けずに立ちつくしていた。

このあたりにはふたつの人種が存在している。新しいマンションに引っ越してきた、上品な服装をした人々。もとから棲んでいた、汚れたような服を着ている人々。

マンションの側の人間と、マンションの内側に連なる、小さな古いアパートに棲む人間を区別するような思考したい、わたしの思い上がりではないのかと塔子は自問することもある。

しかし、見た目に明らかな両者に、ほんとうはそんな明瞭な差はないのだとも感じている。

「大丈夫？ 藤野さん」

声をかけられて塔子のははつとわれにかえる。藤野とは塔子が結婚してからの姓だと気がつくまでにいつもちよつとした間が生じる。

「喧嘩している女性のすぐ近くにいるから心配して見ていたの。なにかあの人たちと関わったの？」

同じマンションの、栗田という女性が立っていた。塔子の娘と同じ〇歳の子どもがいるのでお互

いに顔見知りだった。栗田のほうは子どもを保育園に預けて仕事をしている。大きなビジネス用の鞆を持って、かっちりとしたスーツを着ていた。鞆もスーツも一目で上等なものだとわかる。仕事をしてそれなりの地位とお金を得ている女性特有の自信に満ちた表情。かつて塔子もこんな恰好をしてオフィスに通っていたのだ。そして自分もこんなに自信満々の顔をしていたのだろうか。塔子はほとんど感心して栗田を見た。

栗田を時々マンションで見かけるとき、世界すべてを皮肉な角度から眺めているような表情だという印象を持っていたが、ビジネススーツに彼女のその表情はしつくり馴染んだ。

木綿のゆったりとしたワンピースというような母親的なファッションをしているときに不穏だと思えたものは、仕事をするうえではむしろ必要であるのかもしれない。

「平気です、わたしは関わっていないから」

塔子は平静さを装って返事をする。

栗田からは絶えず威圧的なムードが伝わってきた。仕事をしている時代に気の強い女性とはよく関わったので慣れっこだと思っていたが、塔子は栗田と向かい合っていると居心地の悪さを感じた。なんとなく上から見下ろされているような屈辱感があるのだ。栗田に対して、自分が妊娠するまで仕事をしていたことを告げたことがあったかどうか、塔子は思い出そうとする。仕事をしておらず赤ん坊と過ごしているという下に見られている気がするのだ。塔子は出産してから、母親たちを、女性を仕事をしている女性、仕事をしていない女性というふうに分けて考える癖がついてしまった。

栗田とこれまでどんな会話をしたのを思いだそうとして、しかしここ最近の塔子は、誰と話をしてもほとんど放心していたのだと気づく。子どもを連れただけの母親たちとどんな会話を交わした





のか全く思い出せなかった。子どもを傍らに、かなりの長い時間会話をしたという記憶はあるのに、肝心の会話の内容は思い出せないのだ。

「それより、お仕事はもう終わったんですか？」

塔子は尋ねる。

「そうよ、今は時間短縮で働いてて勤務は四時までなのよ。これから息子を保育園に迎えにいくところなんだけど、駅から出たら喧嘩が見えるからびっくりして近づいたの。そうしたら藤野さんが近くにいたというわけ。ねえ、あの二人なんで喧嘩していたの」

「バスを降りるときに、どちらかがぶつかったみたいで、それでちよつとなにすんのかなよ、って具合にもみあいが始まったんです」

「ぶつかったからって、あんな喧嘩するの？ だって大人でしょ。おまけに女性同士よ。それで因縁つけるなんて中学生の不良少年じゃないんだから」

栗田は信じられないという表情をした。互いに価値観すべてを共有していない相手と会話することから最近離れているせいで、塔子は次にどんな反応をすればよいのか分からなかった。うかつな反応をして相手に変だと思われるのも嫌だったし、あとから自分で言ったことをものすごく後悔するのだ。

意表について栗田ははじけるように笑いはじめた。もちろんどこか皮肉な調子に顔全体をゆがめたままで。

「やだ、ごめんなさい。でもおっかしかったわよね。だって信じられる？ 噛みついてたわよね。血が出るくらい噛み付くって、すごいわよね。なんていうの？ 猛獣の決闘ショーみたいだったっていうと失礼すぎる？」

栗田は発作のようにけたたましく笑いつづける。笑い声はザラザラしたサンドペーパーを思わせた。そのつんぎくようなポリリウムはこの場所では異様なものに聞こえる。

それでもつられるようにして一緒に笑うべきかと迷ったが、にやにやと曖昧な表情を作ったままになった。栗田がどのような意味で笑っているのかわからなかったし、それに本当に今は笑うような気分ではなかった。

「じゃ、わたしこれで保育園に向かうけど」

栗田はこわばった笑顔のまま言った。

「わたし買い物があるから、ここで」

栗田との会話から開放されることで安堵した声が出て、それが相手に伝わったのではないかと塔子は笑いかけた表情を途中で止めてひきつけている。

栗田は、少女のように手を振るといふ、あまり似合わない仕草をしてからいつてしまった。かつかつとヒールの音がやはり甲高くこだまするのを聞いて、辺りが思いがけない静寂に包まれていることに気がつく。

しとしとと雨の降るロータリーは帰宅ラッシュが始まって、人の数が増えつつある。

しかし、海の底にいるように静かだった。

駅に隣接するカフェレストランの軒下にオレンジ色の光がぼつと灯った。そのオレンジ色は異国めいていて、蒼い夕闇の中に鮮やかだった。塔子はこれとよく似た雰囲気のある国を旅したような気がした。どこだっただろう。渡航した国をコレクションするように旅をしていた。なぜあんなに遠くに飛び出したかったのだろう。

夕闇は濃さを増していく。ふやけたように白く濁った一日がようやく夜を迎えようとしていた。



梅雨が明けたと宣言されてから、ずっと霧雨に沈んだような毎日が続いている。

梅雨が明けたというのは嘘なのではないか。霧のはいあがってくる街で、夢をみさせられているのだけなのではないか。

霧は夢の続きだ。

夜に紛れてしまえば、ここもよくある都会の人口の多い街のひとつだ。駅の反対側には猥雑な繁華街が存在するが、今の塔子は踏み入ることもない。ラブホテルや風俗店の派手なネオンが駅や線路の向こう側に見えるが、それは遠い風景画のようなものだ。

そして、夜に覆われて安心して居るのは、ほかでもない塔子なのだと思いつく。

いろんなものから逃れて離れて、この町に潜んでいるたくさんものたち。ワイドショーで指名手配中の犯罪者について、コメンテーターが、「田舎に逃げるよりも、都会の雑踏に紛れていたほうが見つかりにくいですね」と言っていたのを、妙に納得して聞いたことがある。確かに田舎には隠れる場所はない、と塔子は生まれ故郷の田舎を思い出す。

ここは安心する。

ひっそりと目立たずに生きている。

犯罪を犯したこともなければ、恨みを買って誰かから狙われているわけでもないのに、ここに暮らしていると、この巨大な匿名にふかぶかと護られていると安心できるのだ。

かつて、巨大な匿名のなかで、必死に自分の名前を際立たせて世界中に認識してほしかったような気もするが、もう、よく思い出せない。

娘はまだぐっすりと眠っていた。本当によく眠る子だと思う。夜泣きもほとんどしない。オムツが濡れても朝までぐっすり寝てくれる。そのぶん子育ては随分ラクをさせてもらっていると塔子は

娘のやわらかい頬にそっと口づける。同じ月齡の赤ん坊のいる近所の母親から、夜中はいまだに二時間おきには泣いて起こされるから常に寝不足だという話を聞いたばかりだった。

子どもを連れて歩いていると、時々同じように子連れの母親と挨拶をして立ち話をするのだ。

寝かしつけるために、電動で動く揺りかごを買ったり、泣きやまないときは旦那さんと一緒に車に乗せてドライブをすることもあるそう。車の振動が心地よいらしく寝てくれる可能性が高いとその母親は言っていた。夜中の三時にドライブにでかけるといのは一体どんな心地がするものだろう。

泣きわめく、まだふにやふにやの赤ん坊を抱きかかえて真夜中の駐車場へ向かう。丑三つ時、子どもの泣き声だけが静寂をふるわせる。

草木も眠る深夜のドライブ。

チャイルド・シートに乗せられた赤ん坊はまだ泣きやまない。

夫婦はどんな会話をするのだろう。

塔子は赤ん坊のうすい皮膚を通して伝わる熱に自分の肌をおしつけるようにする。

こんなによく眠る子と過ごす日々は、なんだか一人つきりでも二人つきりでもない、心もとない時間だ。

繭は起きている時間にはよく笑うようにもなったし、近頃では危なっかしいがお座りもできるようになった。二人だけの長い時間、塔子はよくとりとめもなく繭に話しかける。

ささやくような塔子の声が繭のまだ薄い耳たぶの奥の鼓膜に伝わる。気持ちに通じ合っているみたいに、繭はうっとりとして塔子の目をみつめている。

そういうときに確かにこの子と一緒に生きているという実感がやってくるのだが、こんなふうに



深く眠られると、塔子は取り残されたような気になる。やがて自分すら無くなってしまおうような気がするのだ。

3

おかしな天候が続くままの八月は、ぐったりとうずくまってしまったように動こうとしない。

太陽は分厚い雲の向こうに隠れたまま、毎日スコールのような雨が降ったあと、熱い湿気のかたまりが暴力的な凶々しきで居座る。

今朝も、リビングから見渡せる対岸のトーキョー・シテイは、錆色のもったりと重い粘土の塊のように見える。

あの鈍重な塊が、首都の機能を果たす巨大な都市だとは思えない、と塔子は思う。とうの昔に亡びた都の上に、亡霊たちが飛び交っているようだと思う。

その亡霊たちの姿が見えるのではないかと塔子はぎゅっと目を細めてトーキョーの上空を睨みつける。建築中の東京スカイツリーのシルエットが意地の悪い魔女のように風景の一番真ん中に聳えたち、その不吉な世界を総べているのだ。東京タワーはもう電気を落として、中空に霧消してしまつたように見えなくなっている。東京タワーは灯りがついてるときだけ、親指の先ほどのちいさなサイズでこの窓から存在を確認できた。

雨の日が多いのに、まとまった降り方をしないせいかわ川の水位も下がり、対岸はむき出しの土が顔を出していた。

ブルーシートでできた家々は相変わらずそこに並んでいる。東京都の一番端を囲むようにして。だから首都を護る城壁に見えなくもない、と塔子は思う。



塔子の家の真向かいの、あのコーヒーを飲んでいた男の姿はなかった。

気がつくといつもその男の姿を探していた。そこについてほしいのかいてほしくないのかわからないが、とにかく探してしまおうのだ。

塔子は窓辺から離れて、夫にコーヒーのおかわりを勧めた。

「今年は冷夏ってわけじゃないんだって。天候不順ではあるけれど。ラジオの朝早い番組でそう言うてたわ」

塔子はコーヒーカップを拓也に手渡しながら言う。

「確かに太陽は顔を出さなくてどんよりしているけれど、それなりに気温は高いからね」

拓也は携帯端末をインターネット接続して新聞を読んでいたが、顔を上げて、礼儀正しい微笑みを塔子に向けていた。

「でもそれでもやっぱり太陽が顔を出さない分、気温はそれほど高くないと思う。だからてつきり冷夏なのかと思ったのよ。冷夏じゃなくても、ちよつと今年の夏は異常だと思う。梅雨が永遠に明けないみたいにじめじめしてる。こんな不吉な天候、生まれて初めて」

力を込めて塔子はそう述べる。

「へえ、僕のほうは昼間のうちはほとんどオフィスの空調のととのった空間にいるから、今年の夏、どんな天気が続いているのかあまり気にかけたこともなかった。窓から見える空は確かに曇っていることが多いけど。でも、君は今年、ずっと家にいるせいで天気のことが必要以上に気になるんじゃないかい。去年までは君も仕事をしていたしそんなに天気の話ばかりしなかったよ」

拓也にそう言われて、そういえばそうだ、と塔子は思う。

家において、天気のことばかり気にして生きるのは確かに生まれて初めてのこともかもしれないと思



う。仕事を辞めるまで、その日の天気はどうであるとかその季節の気温が高いのか低いのか気にかけて過ごしたことはほとんどない。

春一番が吹いたとか、桜前線が北上していか、梅雨入りしたとか梅雨があけただとか、その手のことに塔子はそれほど関心がない人間だった。なぜわざわざ多くの人が天気のことを話題に選ぶのか不思議に思っていたし、会社の同僚などに、桜がいつ開花すると思うか、などと尋ねられると返事に詰まるのが常だった。

しかし今、かつて子どものいなかった時代、夫と一体どんな会話をしていたのか塔子にはもうよく思い出せない。

そして天気の話ばかりしている。

グラスにオレンジジュースを注ぐ。紅茶のポットに茶葉を入れて沸騰したばかりのお湯を注ぐ。昔編集していた雑誌に、こういう食卓の写真をよく使ったなど塔子は思い出した。

「おいしい？」

塔子は唐突に夫に向かってそう尋ねる。

「すごく」

満足そうに拓也が頷いてみせる。

その表情を見て、自分は満足なのかどうかよくわからない。

まだ寝室で眠っていた繭が泣き始めて、塔子はキッチンを離れる。

拓也が仕事にいつてしまい、いつものように繭とふたりきりで過ごしていたその日の午前中、宅配便が届いた。

金沢の実家からの荷物だった。

段ボールを閉じてあるガムテープを剥がしてみると、中にはクッション材のようなものが詰め込まれている。なんだろうか。手をつ突っ込んでみると、さらにクッション材でひとつひとつ丁寧に巻かれた小さな壘がいくつもでてきた。

巻き付いているものを剥がすと、「テムズ」と書かれたラベルが貼ってある小さな壘だった。他にも、様々な川の名前が書かれている壘が出てきた。

塔子はすぐに実家に電話をする。母親がでて、

「無事に届いたかね」

と言う。

「忘れたの？こないだ電話で話したときに、あなたが川の水を集めてまわったあの壘がどこかにしまわれてないか探してくれて」

母親は呆れたような声を出す。そういえばそんなことを話した。

「見つかったらどうすればいいのって聞いたら、こちらに送ってほしいって言うからからわざわざ送ってあげたのよ」

塔子がすっかり忘れていているらしい口ぶりなので、母親は慥然とした声を出した。

「ええ、忘れていたわけじゃないんだけど・・・」

塔子はおもごもと言いつつ訳を唱えたが、母親はすぐに話題を変えた。

「あんた、夏休みに繭ちゃんやんと拓也さんと、金沢に帰ってくるやろ」

母親は嬉々とした声を出す。初孫になる繭の顔を久しぶりに見られるのが嬉しいらしい。頼んでおいた荷物を塔子がすっかり忘れていたのも、幼い頃からのわがままの延長くらいにしか捉えてい





ない様子だった。

「うんそう。五日間くらいお世話になろうと思っっているの。よろしくね」

電話を切ったあと、塔子はすべての壇をとりだした。

実際に壇の中に水は入っていなかった。そういえば、その水はそれぞれ藻が発生したりして濁りはじめ、とてもじゃないがそのまま保管する気にはなれなくなり水を棄てたのだった。壇だけは手放す気になれなくて、あるとき実家にまとめて送ったことを思い出す。そういえば梱包に使ってあるクッション材も、そのときに塔子が用意したもののままだった。

壇は全部で十四本あった。

リビングの、どっしりと巨大な本棚の一番上にそれをずらっと並べてみる。

拓也はなんと言うだろうか。

まあいい。文句を言われたらまた段ボールに仕舞いこもうと考えて、塔子は段ボールを丁寧に畳んでしまいこむ。中のクッション材は、〇歳の娘がさっそく手にとっておもちゃにしはじめたのでそのまま使わせることにしたのであった。

#### 4

みっしりと絡み合う蔓は、まだまだ伸びていくだろう。蔓から吐き出される陰気な色の葉がそこをまるで北方の暗い森のように覆っていた。

ぬるっとした表面の葉が生い茂り、判でおしたように同じ花がびっしりとついている。らっぱ型のその花は朝顔にそっくりだが、昼近くになっても開いているということは、これは昼顔という花なのだろうか。とにかくその紫色の花が咲く植物がこの辺り一帯からみあって自生しているのを

塔子はよく目にしては、その花のことがあまり好きになれないと思っている。ほとんど朝顔と変わらないのに、朝顔につきもののすずやかさはみじんも感じられない。

塔子は繭を入れたバギーを押して歩いている。その好きになれない植物が密生する場所を通り抜けようとしている。自然と足が速くなる。

駅まで歩くときは、バスの通る大きな道から一本中に入った住宅街を抜けていく。その際、その花の茂みを抜けなくてはならなかった。すると公園のメインの広場に出る。普段は子ども大勢いて賑やかなのだが、今日は静まりかえっていた。遊具のそばに藤棚があつて、こんもりと緑が茂っている。藤棚の下にはベンチが並んでいて、そこで休憩することができたら、といつもちらつと思う。でもベンチには、一人か二人のホームレスが座っている。公園の中にはブルーシートでできた小屋もある。

ホームレスが座っているからといって、そこに他の人間が一緒に座ってはいけないということもない。でも積極的に座ろうという気分にもならない、と塔子は思う。危害を加えられると思つていゝるわけでもない。異臭がするから近づくのを嫌がつているわけでもない。

むしろ、塔子は自分がそこに座ることで彼らが遠慮してそこを立ち去ることが怖かった。彼らがゆっくりと休んでいるところにならずかかと入り込むのは間違つているという気がした。風もないむつとする午後、藤棚の下はいくぶんかは過ぎしやすいかもしれない。そこでくつろいでいる人々を邪魔することはできないという気持ちだった。

藤棚のほうから無理に目を逸らすわけでもなく、でも凝視するわけでもなく、塔子はそこを通り過ぎようとする。

藤棚の下に座っている一人が、なにかを飲んでいた。





はっと気がついた。見覚えがある。

先日、対岸の河川敷で、川を見ながらなにかを飲んでいた男、それはこの男ではないのか。

とはいえ対岸のトーキョー側に棲む彼らが、こちら側に移動してくることがあるのか、塔子にはよくわからなかった。

川の向こう、対岸からは橋がないと渡ることはできない。このあたりには徒歩で渡れる橋はない。電車に乗って渡るか、もっと上流にある橋までいくしかない。

でも、彼らには彼らのやりかたで、川の向こうとこちら側を自由に行き来する方法があるのかもしれない。

あれは彼なのだとか確かめたいが、じっと彼を見るわけにはいかなかった。体が緊張のため硬直する。首を動かさないで、眼球の動く範囲せいっぱいで男を凝視する。目がきりきりと痛むくらい塔子はそちらを注視した。こつそりと。

髪も肌も洋服もすべて一体化したような色をした男は、この街の至る場所にいるホームレスと同じなのでそれで見分けがつくかと言われそうだが、でもやはりあれは絶対にあの男だと塔子は確信した。

やがてもうどうやっても彼が視界に入らなくなり、塔子はバギーを押して、彼から遠ざかる。

背中に彼の視線が貼りついていて痛いくらいだと塔子は感じる。きっと彼は気がついたはずだ。小屋の向かいに建つマンションの十九階の窓から自分を見ていた主婦はわたしであると。

それどころか、わたしの様子を伺うために対岸にきて、ここで待ち伏せしているのではないか。塔子は足を速めた。

すべて妄想に違いないとかき消そうとするものたちが、いよいよ明瞭な輪郭を持って塔子に迫っ

てくる。

真実と虚言の違いとはなんだろう。

密生する花が不気味な顔をしてこちらを見ている。みっしりと密生しているひる顔が、すっぱい匂いを放ちながら、塔子とホームレスの男の間の距離をゆがめる。

ぐにやっとなつづれた空間に、幾千もの陰気な花が咲き続け、夏はもう、永遠に終わらないかと思えた。

5

今朝も霧の中だ。塔子は体をくねらせながらベッドを抜け出す。拓也と繭はまだ深く眠っていた。強張ったからだじゅうの筋肉が悲鳴をたてていた。最近気候のせいかとでも疲れている。

相変わらず湿気はふてぶてしく街に居座り続け、季節はびくとも動かないようだった。さらに最近気温も高く、なにもしなくても一日が終わると疲れていて、朝起きるともっと疲弊している。いったいいつ疲れを取ればいいのか見当もつかない。そんな長い眩暈のトンネルを行くような日々だった。

リビングに行つて、カーテンをそつと開けて、狭い隙間からすぐに川の向こうに目を凝らす。

あの男が、こちらを見ているのではないか。昨日公園でわたしのことを見張っていたあの男は、いつも対岸からこの部屋を観察していたのではないか。そんなことを思いながら塔子は白い霧に包まれているその男の住む小屋を見つめた。

小屋の前には誰も立っていないかった。粗末なドアが取り付けられているが、川に面した側には窓



はない。しかし、どこかに小さなぞき穴があってこちらを見ていないとは限らない。

塔子はすこしずつカーテンを開けていった。男がこちらを見ていると思うと、ぞくつと鳥肌がたつ。ざらつとした快感が走り抜ける。自分が快感を感じたことを不快に思い、両挟みのなかで、思考が停止する。

スリルのあるゲームを味わうときに伴う不快とすれすれの場所にある快感は、子どもの頃によく味わった。それについて塔子は思い出そうとする。危険に満ちてはいるが、絶対に安全な場所にいる安心感もある。そういうどつしりした安心の中でのスリルはときに快感だ。その快感を味わうために危険を冒す場合もある。するとわたしは今、絶対的な安全地帯にいることを自覚しながら遊ぶ子どものような存在なのか。

しかし、子どものわたしは気がついていなかった。この世に絶対の安全などは存在しない、と塔子は思う。

危険ではないと思っている場所と、実際に危険な場所はつねに交じり合っている。まったく混在しているというのではなくて、境界部分がぐにゃつと溶接されている。接している部分は一部分ではなくて、どこまでも永遠に伸びている。まるで近くに寄り添う川のように、と塔子は考える。

ふっと気を抜くと、あつという間に転げ落ちてしまうだろう。

そんな危険な境界の場所に暮らしているのだろうか。

塔子はぶるつと震えを感じてカーテンから離れた。

コーヒー豆をがりがり挽いて、出来たての熱々をカップに注ぐ。そしてソファに座ってそれを飲みながら、ゆっくりと並んでいる小瓶たちを眺めた。

気がつくときとただけシールが剥がれてしまったのか最初から空のままなのか。ラベルのついて

ない塚があることに気がつく。

ふいに塔子はその塚に、マンションの目の前の川の水を入れてみたいという衝動に駆られる。

朝の家事が一段落して、塔子はごみを棄てるために外に出る。ゴミ袋を両手に持ってエレベーターに乗り、一階に下りる。マンションのエントランスを出て、同じ建物の一階にあるダスト・ルームの鍵を開けた。マンションでは二十四時間いつでもごみを出してよいことになっていた。深夜から早朝の時間帯だけは施錠されていて、住人は暗証番号を押して鍵を解除することになっていた。

塔子はゴミを棄てると、マンションの川に面している遊歩道に出た。

泥がうっすら混じっているような黄色い霧が漂っている。

その向こうに流れる川は気配を消している。

塔子は遊歩道をゆっくりと歩く。のんびり散歩を楽しむと言うよりも、なんとかこの川と親しくなりたいという焦りにも似た願いから努力するようにして。どことなく塔子の動きはぎこちない。

遊歩道からは、土手が川に向かって急な勾配になったあと、川との間に水平な部分が広がっていた。上から見るのと違い、これだけ大量の水のふちを歩くのは緊張を強いられることだと塔子は思った。

しかし塔子は抗いがたく、土手の傾斜を下り始めてしまう。

土手に植わっている芝生はしつとりと濡れている。サンダルの底がつるつると草の葉を撫でて滑ってゆく。幾度か転びそうになる。そろそろと慎重に塔子はかなり傾斜のきつい坂を下りていく。下りるたびに水面が目前にせまってくる。もし派手に転んで、勢いが付いたまま斜面を転がるように落ちて水に飛び込んでしまったら、溺れてしまうのではないか。

やっと川岸ぎりぎりの場所まで来た。黒い土は固く見えるが、実際に立ってみると、案外脆くてこのまま足元が崩れ落ちてしまうような気がした。そしてこの黒い土こそが、自分の住んでいるマ



ンションの土台になっていることに気がついて、じわっと背中が汗ばむような気持ちにもなった。

塔子はしゃがむと、小壇を持った手を水面に下ろす。簡単には届かないので、片手を地面につけて這いつくばって、身体の半分を手を大きく川のほうへ乗り出すようにして腕を伸ばした。

壇が水面に到達した感触がして水を集めるようにしてすくう。そのままそれを目の前へもってくる。

もっと濁っているのかと思った水は、驚くほど澄んでいた。

這いつくばった姿勢から百八十度ごろんと回転して塔子はそのに仰向けに寝ころんだ。壇と水をすかして向こうに空が見えて、その端っこにマンションがひっかかっていた。

上半身だけを起こして静かに蓋を閉めると、塔子は満ち足りている気分であることに気づく。

水を採集したことによって、川が自分の親しいものだという気になれたのだろうか。

そのとき、水をかき回すような音がしたような気がして、塔子は川のほうを見る。

水はとろみがあるような音をたて続けている。最近湿気はあるものの、まとまった雨も降っていないから、もしかすると川はねばつくように腐敗しはじめているのではないかと思う。

霧の向こうに、人影が見えていた。

塔子は身体をこわばらせた。

人影は川面から生えているようにすつとまっすぐに伸びている。それがどんどんこちら側へ近づいてくる。

ボートだ。ボートを使って、誰かが川を渡ってくるのだ、と塔子は気がつく。

そういえばいつも向こう岸にいくつかボートが転がっている。

打ち棄てられているものだと思っていたが、あのボートは使われていたのか。



ときどきカヌーやカヤックなどのスポーツとしての舟遊びを楽しむのをこの川でも見ることはあった。しかし、今こちらへ向かってくるボートは、スポーツをしているという雰囲気ではない。対岸に小屋を造って棲んでいる人間に違いない。

塔子は引き返そうと土手を登る。土手にはえている草をつかむようにして必死に駆け上がる。

マンションの中へ逃げ込むようにして入る。裏口の非接触キーを解除した電子音が鳴り響き、その音がボートに乗っている人間の耳に届いたに違いないと思う。心臓が高鳴って喉が締め付けられた。

エレベーターに乗ったとき、塔子はダスト・ルームの鍵をかけ忘れたことに気づいた。

早朝の今の時間帯はまだ施錠しなくてはならない決まりだ。

しかし、塔子はもう下に戻る勇気がでなかった。そして鍵のかかっていないダスト・ルームに、舟で渡ってきた人間が侵入することを想像した。

これまで男が侵入することはできなかった。いつもマンションの住人が嚴重に鍵をかけていたからだ。

それなのにわたしが初めて失敗した。塔子はそんな思い込みにとらわれる。

男はダストルームに入るに違いない。

少しずつ、わたしの棲んでいる領域と、彼らの棲む領域はまじりあってきている。

エレベーターの中には、さつき塔子が掴んだ草の、青い匂いが漂っていた。

「おはよう、毎日こんなに早く起きているの」

部屋に戻ると拓也が早朝のリビングに座っていた。



「そっちこそ、なんでこんなに今朝は早いの？」

塔子は目をまるくする。拓也は宵つ張りで、朝は起こしてもなかなか目が覚めない。

「たまたま目が覚めちゃってね」

夫は自分で新しくコーヒーを淹れて飲んでいた。

「コーヒー、まだあるけど、もう一杯飲む？」

夫が立ち上がってコーヒーを注いでくれようとする。

塔子はコーヒーを受け取ると夫の隣に腰を下ろした。

「さつき、川のそばを歩いていたでしょう」

夫に言われて塔子は驚く。

「朝起きてベランダに出たら、ちょうど君が歩いているのが目に入った」

「ゴミを捨てにおりたついでに散歩したのよ。まさかあなたが上から見ているなんて」

「面白いからずっと上から眺めていたよ」

「声をかけてくれれば良かったのに」

「こんな早朝に窓から大声を出したら、近所中に響きわたってしまうだろ」

拓也は苦笑いをする。

「もしかして、それなら対岸からこちらに向かってくるボートも見えた？」

塔子は夫に詰め寄るように問うた。そして自分が土手を下りていったのも見られていたのだろうか。

「ボート？ いや、気がつかなかったけど。霧も出ていて視界もよくなかったし」

夫はそういいながら窓の外を確かめるように見やる。

それで気がついた塔子もすぐに窓際に寄っていく。あのボートがこちら側の岸に係留されているのではないかと。

もうずいぶん霧は晴れている。

しかしこちら岸にも、川の流れにもボートの姿はなかった。対岸にいつもボートが転がっている辺りにも目をこらしたが、そちらにも見あたらない。ボートは例えば川のもっと下流に向かって進んでいってしまったのだろうか。川を水路として、夜や早朝などの暗闇に紛れて、ボートで行き来している者たちがいるのだろうか。

塔子は、確かにボートがこちらに向かってきていたの、と夫にそう主張しようとした。でもうまく言葉が出てこない。

それでコーヒーを飲むために腰を下ろした。夫はもう窓の外には興味を失ったらしくて、なにか写真の多い雑誌を読むことに戻っていた。

「そろそろ朝ご飯食べようか」

塔子は軽く頭をふりながら、キッチンに立った。ポケットには川の水を入れた壺が入ったままだった。

6

その日は再び雨だった。朝、川べりを歩いたときは降っていなかったがそれはほんの小休止だったというように自然にまだ雨は降り始めている。雨は夏中、ずっとひと続きのもので、永遠に止まないように思える。

塔子は午後から繭を連れてマンションの、キッズ・ルームにやってきた。散歩にもでかけられな



いし、その日はバスにのって駅の近くまで出て行くのも面倒に思えた。

マンションのエントランスホールにつながるその部屋を、塔子はそれほど利用していなかった。そしてキッズ・ルームには毎日、ほどほどの数の親子連れがやってきているようだが、決して賑わうというほどにはならなかった。

塔子はこれまで母親同士のつきあいでもストレスを感じることもなかった。ストレスを感じるほどに密接なつきあいをしてこなかったからでもある。

そもそも塔子は、女性特有の、仲間内の親密さを保つための棘を含む排他性が怖くて、特定の女どうしのグループに属すことなく生きてきた。その都度つきあいのある友人はいたが、たぶんどの友人にももっと親密な別の友人がいて、塔子はどの友人にとってもその他大勢の一人だったという自覚があった。でもそのくらいの立場が一番ラクだったのだ。だからいまさらここでわざわざ女友達を作る気は全くなかった。

ここのマンションの母親である女性たちもまた、心の平静を脅かすほどの人付き合いを望んでいないようだった。

適度な距離を保ったその輪の中に、ぼんやりと混じっているくらいにいるのは楽だった。誰かが特に接近してきたと思えばさっと身をかわし、またうっかり自分が誰かに近づきすぎても、向こうがすっと離れてくれるくらいの。

「藤野さん、こんにちは」

キッズ・ルームに入って塔子に最初に声をかけてきたのは、栗田だった。駅でバスを降りたときにばったり会って以来だ。

「今日、代休で平日が休みなのよ」

平日なのに仕事は？と塔子が尋ねる前に栗田はそう説明した。以前会ったときのかっちりとしたビジネススーツではなく、Tシャツにジーンズというラフな格好をしていたが、やっぱりどこか厳しい表情をしている。それとも栗田は生まれたときからこういう表情をしているのだろうか。微笑んでもどこかで怒っているようなその雰囲気、塔子は緊張して身構えてしまう。

「この間、バスを降りたところで女同士が取っ組み合ってた話をおもしろく話して話をちよみさんにしていたところなのよ」

栗田のまわりに座っていた母親たちの視線が一斉に集まり塔子はたじろぐ。

喧嘩についての話すことをこの場の誰もが期待しているはずだと塔子は感じる。

母親たちの中には言葉を交わしたことがある者もいたし、初対面の者もいた。彼女たちが皆、じつと塔子の言葉を待っている。皆、乳児を抱っこしているか、授乳をしている者もいる。

このマンションだけで百世帯以上の家族が暮らしているが、いったい赤ん坊を抱えた母親がどれだけ生息しているのだろうか。

「でも、みなさんも判るような気がしませんか？ イライラしていて不快なときに誰かがぶつかってきたらそれだけで頭にきて相手を殴り倒したくなるでしょ」

はっと気がつくとなんな言葉が塔子の中に流れていた。今、わたしはこの言葉を本当に発したのだろうか。からからになった口の中に、やはり乾いた舌がはりついていてすることに気がつき、その言葉は発せられていないことに塔子はほっとする。

そしていつのまにか母親たちは和やかに談笑をしていた。塔子が言葉を発しないうちに、皆はまた元の会話に戻ったらしい。

塔子は繭を抱っこ紐から出す。はいはいを始めた繭を追いかけようにして、塔子は母親たちの





輪から少し距離を置く。

空調が効いているのでとても爽快なはずなのに、塔子はやっぱりぼんやりしていることに気づく。いつまでぼんやりしたままなのか。もともとこんなふうにはぼんやりしていたのか。これまでだって頭がクリアに澄み切っていたことなどないのではないか。

キッズ・ルームの外に面している壁は一面ほとんどがガラス張りで、窓の向こう、ごっごっした剥き出しの泥の土手とその向こうにすぐ川が横たわっている。やはり川はどろんどろんと重たげだった。だいいち流れている様子もない。まるで沼のように滞っている。これではどちらが上流なのかもわからないくらいだ。

上から見下ろさないぶん距離が近いのか、向こう岸のブルーシートでできた小屋も鮮明に見える。全面ガラス張りとはいえ、土手との間に柵が設けられているので多少目隠しにはなっている。ここからは柵の隙間から向こうを伺うことはできるが、あちらからこの部屋の中をすつきりと見渡すことはほとんど不可能だろう。

繭がはいはいをしたり積み木で遊んでいるそばに座って、塔子は窓の外をずっと眺めている。

時々母親たちの輪からどっと笑い声が起こる。楽しそうだなとは思いますが、その笑いの中心に居座ることを望んではない。たまにそばにいて一緒に笑ってもいいが、だいたいは少し遠くからにっこり微笑んだ顔で眺めていたい。あの人々はわたしの敵ではないが、味方でもないのだと思う。決して敵意は持っていませんという証拠にいつも唇に微笑を作って、でも大きな声で笑ったりはしないでおこう。大声で快活に笑うのは、では、いったい誰の前でなのか…と思う。もう長い間、誰の前でも腹の底から笑っていないような気がした。

「ねえ、藤野さん！」

はっと気がつく。塔子の名前が呼ばれていた。

「誰かのお部屋でお茶をしようと話をしていたのよ。そういえば藤野さんのお宅にまだお邪魔したことがないから…」

栗田がにっこり微笑んで塔子のほうを見ていた。

「もちろん、喜んで。うちの部屋でよかったら」

塔子は反射的にそう返事をしていた。突然部屋に人がやってくることを引き受けて焦る気持ちはなくて、変に醒めた気分なことが意外だった。

同じマンションに住んでいる人間はほとんど同じような間取りで生活している。床の色や壁の色に少しずつ違いがあるが、大差のない部屋に棲んでいる人間を招くことはとても気軽なことに思えた。

そのうえわたしの部屋のインテリアは厳選した家具や小物を配置していて、とつてもくつろげる雰囲気だ。誰が来ても不快な思いをすることは思えない。いつも数種類のお茶があるし、昨日焼いたパウンドケーキまで残っている。ざっと五人くらいのお母さんたちに振舞うには十分だろう、と塔子は素早く思いめぐらせる。掃除だって午前中に済ましている。

「よかった。突然お邪魔じゃない？　うちでもよかったんだけど、昨日仕事が遅かったから散らかってたままで」

その台詞を言う栗田の芝居がかった表情を見て、一緒にお茶に参加できるように気を回してわたしの家でお茶をしましょうともちかけてくれたのではないかと塔子は悟る。

余計なお世話だとかそんなふうに思ったわけではない。それでも一瞬重いものが塔子にはのしかかった。



でもくよくよすることでもない。塔子は思い直す。

ただ、ここにいる母親たちを部屋に招き、お茶を振る舞い、午後のひととき、にこやかにほほえんでいればいい。

娘もたくさんの同じ年頃の赤ん坊と一緒にいることができ、楽しいだろう。このくらいの月齢の子どもはまだ一緒に遊んだりできないが、それでも子どもが近くにいれば賑やかで嬉しそうにしているのではないか。

7

どやどやと塔子を含めて五人の母親と一歳前後の赤ん坊が部屋に上がりこんできた。

みな、口々に塔子の部屋のインテリアを誉めた。

塔子は冷蔵庫に冷やしてあった麦茶をグラスに注ぐ。

コースターを並べて、そこにグラスを置く。

コアントローのパウンドケーキを切ってそれも皿にのせて出す。授乳中の母親のためにカフェインの入っていない麦茶を用意したのに、ケーキにしみこませたコアントローにはアルコールが含まれていることに気づいたが、塔子は知らん顔をして出すことにした。

母親たちはケーキを口々に褒め、塔子に作り方を尋ねる。

「このレシピは手軽ですが、本格的な味になるからおすすめるんです。卵黄と卵白はべつべつにしつかり泡立てて生地にするんです。とつてもしっとり滑らかなケーキになりますよ。オレンジの風味はコアントローでつけてありますが、オレンジの果汁も入ってます。果汁は生地の様子を見ながら入れるんです。使う卵の大きさによっても生地はゆるくなったりかためになったりするので、

最後に様子を見ながら慎重に量を調節します」

塔子はよどみなく話すことができる。塔子はその気になればとても社交的に振舞うことができる。仕事をしているときも、たいていの相手に好感を与えるような話し方をしていて思っている。

「ほんとうにおいしいわ、このケーキ。お店で買ったたりするのよりよっぽどおいしいわね。それに手作りだと材料も安心ですものね。子どもにはやっぱり安心なものを食べさせたいわよね」

栗田がそんなふうには塔子のことを誉める。語調はやわらかかったが、やはり表情が硬く見える。

この人はこの強張ったような強気な表情のまま、職場でもこんなふうには気を配ってたくさんの言葉をつなぐに力を入れている。彼女の表情はあくまでビジネスだ。了解のうえでそれを受け入れる。ビジネス以外の感情がひそんでいるほうが面倒だから、みな割り切った笑顔をちよほどよい分量返すはずだ。塔子は「ありがとう」と返事をしながら栗田についてそんなふうには考えている。

「わたしも仕事なんかしないでうちでこうやってお菓子を作ったりする生活憧れるわ」

栗田はそう言う。建前でもあり本音でもあるその言葉にどこまで寄り添う返事をすればよいのか塔子は戸惑う。

「まあ！ 外でお仕事しているほうが素敵よ。いまだき、なにがあるかわからないし、夫の収入だけに頼るのっていざというときに不安だわ。わたしもまたお勤めしたいけれど、今は子どもがいてなかなか再就職も厳しくて」

色白の少しぼつちやりとした母親がそう発言する。それも本音でもあり建前でもあり、再び塔子はどんな返事をすればよいのかわからない。だいいち、仕事をしている栗田が塔子のようにうちについてケーキでも焼いていたいと言ったのに、「外でお仕事しているほうが素敵だし共稼ぎのほうで経済的にも安心だ」と反論した母親は、つまり家でケーキなど焼いている塔子には危機感が足り



ないと言っているようなものではないか？ いやそこまで考えないで発言されたのだろうけれど、塔子はなんと返事をすればよいのかわからなくて逡巡する。

自分の言ったことが遠回りしてその場の誰かを悪く言っていることになる、ということにまで気の回る人なのかどうなのか、そもそもここにいる母親たちのことをわたしはほとんど知らないのだ、と塔子は途方に暮れる。

結局言葉は出てこない。

「今は保育園に預けるのも順番待ちが大変なんでしょう。このあたりの待機児童が多いってこないだニュースでやってましたわ。認可の下りていない保育園はとっってもお高いって聞きますよね」

めがねをかけてほっそりしている母親が続けた。塔子は時々この母親とはばったり会って挨拶がてら立ち話をするので顔見知りだった。

「ああ、うちは認可じゃないとこにいられますよ。確かに高いですが、認可保育園があくのを待っていたら、いつまで経っても働けないから仕方なく入れてます」

栗田は相変わらず厳しい表情なのに、愛想のよい声を出して喋る。表情と声色が乖離してゆくほどに栗田が仕事で有能な女性なのだ、と塔子には感じられる。

「栗田さんほど立派な仕事をされていたらそれもいいかもしれないですよ。でもわたしが就職したところで高い保育代を払ってもおつりがしつかりくるくらいお給料を貰えるとはとても思えなくて」

色白ぼつちやりの奥さんが今度はこんなことを言う。働きたいとはいっても、お給料がたいしてもらえないなら働くのは無駄だということですか、と言いつつ直しそうになって塔子は口をつぐむ。

「高い保育園に預けて働いてもむしろ収支は赤字だったりするんですけど、今頑張っつて続けければ将来

的に黒字になるともしれない、って思って投資のつもりでやってはいるのよ」

栗田がそう述べて、その場にいる女性は皆、言葉を失う。

栗田はまっとうなことを述べたばかりに話の腰を折ってしまったという悪戯っぽい表情をしているようでもあり、そう言い放ってすっきりしたようでもあった。

塔子はそのとき、栗田はここにいる母親たちと心底仲良くする気はないんだなと感じる。唐突に感じたような気もするし、薄々感じていたことが真実を持って迫ってきたような気もする。でもどちらでもよい。栗田が仲良くする気のない主婦たちのなかにはもちろん自分も含まれている。

しばらくの沈黙ののち、

「あのー…、わたしもいつかは働こうと思っています。そのうち子どもの教育費もかかってくるし、マンションのローンも早く返してしまいたいし、きつと働くつもりです。いまのままじゃとってもしゃないけどお金がなくて」

今まで黙っていた小柄な母親が弱々しい声でそう発言した。塔子はこの母親のことを今まで見たことがあったかどうか思い出せない。そのくらい存在感が薄い。青ざめたような皮膚に、小さな顔のパーツが遠慮がちに並んでいて、次に会ったときにうまく思い出せるかどうか判らないと思う。

あと黙っているのは塔子だけだった。

なにか発言すべきだというプレッシャーがぶちつと針をさした指に、盛り上がるように膨らんでゆく血のように大きくなる。発言していかないのは塔子だけだというのを確かに他のみんなも気がついていて、塔子の言葉を待っているのが感じられる。

「働かなくちゃとか、お金を稼がなきゃ、っていかにも切羽詰ったように、もっともらしい顔でしゃべっているけど、あなたたち、本当にお金がないってどういうことが知っているの？」





塔子はこんなふうに喋り出したのではないだろうか。

「お金がない人はこんなマンションに棲むことはできないよ。家を買うにはお金が要るのよ。あなたたちはお金がないといいながら子どもに高い洋服を着せて、いい車に乗って、旅行にでかけたり外食したりしているのをわたしは知っているわ。そのどがお金がないの？」

お金がないというのは、そう、棲む場所だってなくなることを言うのだ…。

結局塔子はまた発言しなかったのかもしれない。でもどこかでわかってもいる。

もし塔子が本当に発言したとしても、きっとその言葉は、ここにいる母親たちには届かないだろう。

わたしの言葉は、もう、本当に、誰にも届かないのではないかしら…？

それは、もう、本当に誰にも。

塔子はムキになっていた自分に気が付き、意識して力が入っていた体をゆるめようとする。

そんな塔子の様子を、栗田が興味深そうに見ている。栗田と目があつた塔子は思わず、きつく睨み返す。しまったと思つて、目にゴミが入つたかのような演技をする。栗田を睨んだのではなく、たまたまゴミが入つただけだということにしよう。でもますます栗田はこちらをねっとりとした視線でねめつけている。

ゴシゴシと目の周りを擦りながら、しばらく、母親たちの集まる場所に行くのはよそう、と思う。そんな塔子の気持ちをすべて見透かすような栗田の表情はいよいよ挑発的に感じられる。塔子はもう栗田のほうを見なかった。

近所の母親たちが塔子のうちに集まった日を境にして、重油のような湿気にまとわりつかれた季節が終了して、ひたすら刺すように痛い日差しの夏がやってきた。塔子は夫と娘の繭と一緒に、塔子の実家のある金沢に五日ほど滞在するためにちょうどその日、羽田から飛行機に乗って、この街を遠ざかった。

空調のととのった機内から見える夏空はひたすらに青かった。

塔子はあの街を離れることができてせいせいしたような気分だった。すこしいろんなことに倦んでいたのかもしれない。気候が悪かったし、初めての育児にそれなりのプレッシャーも感じている。ただ家事をこなすだけの日々だったが、少しずつ疲れが蓄積して神経を蝕んでいたとしてもおかしくはない、と塔子は考える。

両親に繭を預けて、久しぶりに夫と二人きりでデートみたいなおことをやっているうちに塔子にはあの川沿いの家での生活が幻かなにかのように思えてきた。

「あんたたちのマンション、ほんまに眺めがええやろ」

みんなでビールを飲みながら塔子の実家のテレビのついたリビングでくつろいでいたときに塔子の母の三和が言った。

「そうよ、窓からの眺めがいいから選んだマンションやのに、当たり前やわ」  
塔子は答える。

「窓の外は川だから、この先、眺望はほとんど変わらないのはいいですよ。駅の付近にいくつもタワーマンションが建ち始めていますが、目の前に高い建物ができてしまったら眺めが台無しになります。うちはその心配がないですから」

拓也が、塔子の両親の前ではいつもそうであるように、礼儀正しく、しかし親しみを込めた口調



でよどみなく喋る。

金沢には犀川と浅野川という川が街を貫いていて、その二つの川は塔子が十八歳で故郷を離れるまで、とても身近な存在だった。風景になじみ、そこに川があると意識しないでも、いつもそこに当たり前に川は在った。

その晩は浅野川で灯籠流しが行われたので、夕方、すこし陽が傾いてから、塔子と拓也、そして繭をベビーカーに入れて三人で見物にかけた。

住宅街からぼつかりと視界がひらけて、そこに川が流れている。ひんやりとした夕方の風が吹き渡る。

「そういうえば、金沢は東京と比べてさほど気温が低いわけでもないのに空気が気持ちいいね。過ごしやすいな」

拓也がそう言って大きく深呼吸する。

「金沢にいるとき、川が存在をことさら意識したことなんてなかったなあ」

塔子も真似をして息を大きく吸ってみた。

「そいえば、君、川の名前の書いてあるラベルを貼ったちいさな壺をずらっと並べたでしょう、あれなに？」

夫が思い出したように塔子に言う。

「あれ？ あれはあの壺の中にその川の水を入れて集めていたのよ。昔」

「えっ、ほんとに？ でもあの壺たちは空っぽだったけど」

「さすがにそのうち濁ったりして全部捨てたみたい」

「しかしどうやって壺に水を入れていたの？」

拓也は目を丸くしていた。

「そのときによって違うけど、だいたい普通に川岸でしゃがんで手を伸ばして。探すところの川にもそういう場所は見つかるのよ。護岸された岸ばかりじゃなくて、さらさらと浅く水の流れている場所が見つかる。見つかるまで川沿いを根気よく歩いても見つからなければ、例えば空き缶に紐を吊したものを下ろして汲んだこともあったな」

塔子は喋りながら、つい先日マンションの目の前の川の水を汲んだときに抗えないような衝動に駆られたことを思い出す。

そのうち、浅野川の上流のから灯籠が流れてきた。

蒼い和紙に滲むみたいなお色の火が不思議なスピードで流れてくる。現実のスピードよりもすこしだけ遅い。でも夢のスピードよりはすこしだけ速い。

「灯籠流してさ、お盆の迎え火とか送り火とか、そういう類の意味があるんだっけ？」  
拓也が珍しくそんなことを口にした。

「そうね。死者の鎮魂とか、そんな意味があるのだと思う」

思ったよりも川風が冷たくて、塔子は鞆の中に入れてきた上着を繭に着せた。

死者の鎮魂というには、その眺めは少々メルヘンじみている、と塔子は考えた。それならばどんな風景が鎮魂にふさわしいのかと考えるが、それももうまくイメージできない。

気がつけば、おびただしい数の灯籠が目の前を流れている。

さらさらと美しい水が流れていく。

同じ川でも、こうも表情が違うものなのか。

それなのに塔子はマンションの目の前の川が懐かしいように感じた。



目の前の川の清らかさはないけれど、あの川には濁りをつきぬけた逞しさがあるように感じられる。あの川があまりにも重たいので逃れてきたのだと思っていたが。

「ねえ、うちのマンションの前を流れている川でも灯籠流しすればいいのにね」

そんなことが起こればいいなんて本気で考えているわけじゃないのに、塔子は拓也にそう言った。ただあの川のことを話題にしたかったのだ、と塔子は気づく。

「灯籠流しはないけれど、終戦の日の花火大会、あれも鎮魂とかそういう意味合いがあるんじゃないのかな」

そう。その花火大会をマンションの窓から眺められますよ、というのが売りのひとつだった。塔子たちは、だから八月十五日の朝には向こうに帰って夜の花火を見るつもりだった。

「でもこのぶんだと十五日に台風が直撃するんじゃないかなあ」

拓也がぼそつと言った。

一陣の風が吹き、川面を滑っていく無数の明かりが一斉にぎゅつと握られたように揺れた。

魂ののった小舟たちはどこへ向かっているのだろう。あの世との継ぎ目だろうか。

川のそばで暮らすわたしは、いつか、その継ぎ目に転がり落ちてしまうことはないのか。塔子はそんなことを考える。でも、境目がごく近くに目に見える形で存在するのはよいことかもしれないとも思う。あるとき気がつかないうちにいきなり足をとられるよりは、いつも用心して生きていたほうが。

闇に目が慣れてきたのか、川底が澄んでくつきりと見えるようだった。光にすかされた水は純度の高い宝石の透明感だった。魚たちもうつとりと無数の灯籠を見送る。

川に運ばれていく無数の魂たち…。



台風が速度が遅いので、結局塔子たちは十五日の朝、予定通り飛行機にのって戻ってくる事ができた。

塔子は久しぶりの我が家の窓をすべて開け放って空気をいれかえた。夜の花火は家族だけで静かに見るつもりだった。塔子は昼過ぎから料理を作り続けた。

拓也が遊んでやっているのを、繭の機嫌のいい声がきやつきやと続くリビングで、塔子はチーズをカットしたり、トマトを湯剥きしたり、肉をソテーしたりした。

夕暮れが近づき、塔子がゴミを棄てるために一階に下りたとき、非接触キーで玄関のドアを解除した電子音が鳴った。仕事帰りといった服装をした栗田がちょうど入ってきたところに出くわす。

「あら、このあいだはどうも。ケーキほんとおいしかったわ」

化粧の濃い栗田の顔が、仮面のようにくつきりと塔子の目にうつる。

「バス通りはこの時間から通行止めですって。花火の見物客がもうたくさん溢れかえっていて、歩いてくるのが大変だったのよ」

栗田は両手に袋を提げていて、

「今日は出来合いの総菜で済ませようと思って。お盆なんだけど仕事、どうしても休めなくて」

そう言いながら袋を塔子の目の前に差し出した。駅の商業施設に入っている高級食材店のものだった。栗田と喋っていると、英語の映画を日本語吹き替えで聞いているような気になることに気づいた。芝居がかかっているというわけではなくて、誰かの言葉をいつも翻訳しながら話しているようなのだ。



「ねえ、対岸のブルーシートのひとつたち、今晚はどこにいるのかしら。さすがにあっちは花火がすぐ近くだから危険よね」

栗田がエントランスの大きなガラス張りの向こうの川を指していたずらっぽく笑う。

花火は対岸の、いつも野球やサッカーの行われている土地に仕掛けられているのを昼間、塔子は窓から見て知っていた。

「じゃ、わたしはこれで」

栗田が手を振ってエレベーターに乗っていつてしまうのを見届け、ゴミの袋を下げて外に出たとき、マンションの庭の植え込みに向かって人影が動いたことに塔子は気づく。わたしの姿に気づいて姿を隠したのではないか、塔子はそんなことを思う。マンション内の敷地に人がたくさん入って混乱を招かないように、今日はマンションで警備員を雇うという貼り紙を見た。それでも誰かが侵入してきたのだろうか。

塔子はゴミを棄てたあと、施錠すべきか迷う。規定ではまだ施錠しなくてもよい時間だった。しかし今侵入者らしき人影を見たばかりだ。

結局塔子は施錠はしなかった。今日は夜まで管理人もいるうえに警備員まで配置されている。心配するようなことはないだろうと塔子は考えた。同時にどうとでもなれ、という気分でもあった。

やがて花火が始まった。対岸のすぐ目の前で打ち上げられる花火は、爆風が届くのではないかというくらいに凄まじくて、塔子は娘をしっかりと抱いて部屋の中でこわごととそれを眺めた。拓也はベランダに椅子を出して「なんだ？怖いのか？」と笑っている。

自宅の窓から花火を見物をしているシーンが高層マンションの広告に使われているのをよく見る。塔子たちの棲んでいるマンションも売り出し中の頃、広告に花火を「特等席からご覧ください」と

いうコピーを載せていた。その特等席というやつからの眺めである。

かつてここには、ぼうぼうと背の高い草が伸び放題で、それが強い川風になぶられているだけの風景が広がっていた。河口に近い場所にはコンビナートや工場が連なっていて、そこから吐き出される油の浮いた水が逆流してきて、川面にぶくぶくと毒薬めいたあぶくを作る。滞った川面は寒天で固められているようだ。みっしりと霧がその場所を覆う。もしくは風が一瞬ですべてを吹き飛ばす。決して人が穏やかに暮らせるような土地ではなかったはずだ。そこに突如、よきよきと高い建物が建ち並ぶ。雨後の筍のように。小ぎれいな服装をした人々が上品な笑みをたたえて引越してきた。彼らは「特等席」で花火を眺めている。いくらか特権的な優越感にひたっているかもしれないが、しかし、ここに暮らす人はそれをあからさまに表明したりしない。わたしたちはトーキョーの都心に棲むことができない者です。トーキョーの中心部で巨大な企業の小さな歯車のひとつとなつて汗水流してせつせと働いているんです。それで稼いだささやかなお金で、やつとこのマンションを買うことができたのです。都心の何億円もするようなマンションに比べるとつつましい買い物です。家族三人か四人が静かに平和に暮らすことができればいいのです。贅沢もせず、勤勉に働いているんです。そんなわたしたちのささやかな楽しみは一年に一度、我が家から見える花火なんです。本当にささやかなプレゼントですが、これを眺めると一年間頑張ったなあと思うことができます。ありがたいことです。

ある人は缶ビールを飲んでいるかもしれない。その傍らには枝豆が用意されているかもしれない。いや、このあたりに引越してきたばかりの若い夫婦なら、駅のそばのあの高級食材店で買い込んだパテやチーズが並んでいるかもしれない。今日はちよつと特別なワインを開けるといふこともあるだろう。



冷蔵庫から、白身魚と夏野菜のマリネを運んでくる。最後にゴリゴリと香りのよい胡椒をひいて、刻んだばかりのみずみずしい青をしたデイルを散らす。

とても繊細で薄いガラスに酒は注がれて、夫婦は乾杯をする。手に入れたマイホームでこんなふうに時間を過ごすことが夢だったと互いに語り合う。独身時代はそれこそ海外旅行で長期に家を空け、毎晩遅くまで飲み歩いたけれど、今では居心地のよい我が家がある。帰るべき家がある。そこには愛する家族が待っている。かつて外を飛びまわっていたのは、こんなふうに一緒にマイホームで過ごす伴侶を探すためだったにほかならない。馬鹿騒ぎの饗宴に耐えていたのは、こんな静かで穏やかな生活を手に入れるためだった。もう遠いあの日々を別れを告げて、子どもを育て、貯蓄に励み、家を守るのだ。そういう誰かの物語と声が、マンションのそれぞれの窓から漏れ出てくるようになった。すべての部屋がファミリータイプのこのマンションでは、家族連れでないほうが珍しかった。

花火を眺めながら幸せを噛みしめる。この小さくてささやかな幸せに感謝しながら…。

花火が終わった直後に訪れた静寂をつんざくようなサイレンの音がした。部屋に戻ってきた拓也がつぶしたビールの缶をもてあそびながら、

「うちのマンションにパトカーが横付けになったのが見えたよ」と言う。

「なにかあったのかしら？ パトカーが来たなんて」

洗い物をしていた塔子は手を止める。

「一応僕が下においてなにかあったか確かめてくるよ。ついでに空き缶も棄ててくる」

そういつて拓也は出て行った。

繭は花火の途中で眠ってしまったし、静寂が訪れる。

拓也の夏休みが終わって、また毎日の生活が繰り返されて、ずっとずっと果てしなく続く、そのことが偉大なことのようにも思えたし、面倒でたまらないようなことにも思えた。

時間の堆積に、また次の時間が降り積もっていく。それは、これからはずっとこの川のそばの、このマンションでのこの時間ということになるのだろうか。妊娠しているときに勤めはやめてしまっただが、子育てが一段落ついたらまた働くこともあるのだろうか。このマンションで身支度をして駅へ向かう。駅からトーキョーへ運ばれる。その電車はこの川を渡ってトーキョーを目指すのだ。自分の今の時間が、未来にすこしでもつながるような気持ちになったのは、もしかするとここへ引越してきてから初めてだと塔子は気がついた。

花火を眺めて、塔子は初めてここが自分の住処だという気持ちがした。

「ゴミ置き場のゴミ箱のなかに、浮浪者が寝ていたらしい。それで住人が警察に通報したんだって」  
いつのまにか戻ってきた拓也がそう言った。

「今日くらいはもう一本飲んでもいいだろ」

冷蔵庫を空けて缶ビールを取り出した拓也はソファーにもたれて、リモコンでテレビをつけた。賑やかな音がリビングに流れる。塔子は洗い物を終えて、ダイニングテーブルを拭く。

「今夜未明にも台風が接近するから、外で暮らしている人たちは大変だな。それで潜り込んだんだらうね。一晩くらいゴミ置き場でよかったです泊まっても構わないけれどね。でも確かにひと気のないダストルームでばったり会ってしまったら通報するかもしれないね」

アルコールが入っている拓也は甲高いピッチで喋り続けた。育ちがよく品行方正な拓也は、おそらく邪心なくそう言ってるのだらう。台風が接近して暴風雨になったら、路上生活者の人々が本当





に憐れだと考えているはずだ。でも、その気持ちに偽りはなくても、拓也はだからといって彼らになにか具体的に手をさしのべるわけではない。普段彼らに関心を払っているわけではないが、非常事態に際してはそれなりに同情する。

「わたしだったら、マンションの鍵をしっかりと閉じて、路上生活者はひとりだって入れてやらないわ。わたしたちの安全を脅かすものは、断じて侵入を許さない。わたしたちだけが安全でいらればよい」

また塔子はそんなふうに言い放ったはずではなかったのか。

彼らをかわいそうだと憐れむことができる人間は、自分が彼らより高い場所にいることを信じて疑わない人間だろう。

「ねえ？ 暴風雨になっても、この頑丈なマンションにいれば大丈夫なものね。自分は絶対に安全だって安心できる人間だけが弱い者を可哀想だと思う余裕があるのよね。でもわたしはそうじゃないのよ。強いほうに属していないの。油断したらすぐにさらわれてしまう。わたしはあっち側の人間を可哀想だなんて思えない。だってわたしだってあっち側の人間なんだもの。同じ土俵の人間だから憐れんだりできないのよ。わたしだって生き残るために彼らと戦わなくてはならないの。蜘蛛の糸の下から同属たちが追いかけてくるのなら、それをけ落として自分だけの安全を確保しないと、わたしが死んでしまうのよ。それで天国の神様がわたしの糸も切ってしまうのなら仕方ないのよ。そういう生き方しかできないのよ」

塔子は憑かれたように話しつづける。

この清潔なマンションで快適な暮らしをしているわたしは、ここに安穩と住めるような人間ではないのだ。

自分には相応しくないと小さくなっておどおど暮らしている。これがまったく幸せなどと呼べるだろうか。幸せをいつ逃すのではないかと心配でならないわたしの今の生活は、全体、幸せなのだろうか。

ポリウムを絞ったテレビの音が低く続いている。リビングは煌々と蛍光灯が照っている。たつぷりとした白い光を眺めて、目に涙を浮かべているのではないかと手をやるが、そこは乾いている。もう涙などわたしは流すことはないのかもしれない。

塔子は透明な水の詰められた小さな壺をてのひらに転がす。壺にラベルを貼らなくては、と思う。「川の名前を、とても硬くて細いペン先でひっかくようにして、くつきりと刻むのだ、と塔子は考えた。

10

夜半過ぎに風の音が強まり、塔子はもう眠れなくなった。朝になる頃には凄まじい風が吹いている。始発からあらゆる交通機関が麻痺しているというニュースが流れている。

寝不足のまま、なんとなく昼過ぎまで家の中を掃除したりして過ごした。昨日飲み過ぎた拓也はずっと寝室で伏せている。そばに誰かいると安心するのか、朝一度目を覚ましたのに繭までまた一緒になって眠っている。

昼にはふたりを起こして素麺だけの昼食を取った。拓也は食べ終わると、なんだか体が重いといってまた寝室にこもってしまった。お酒を飲み過ぎた次の日、一日じゅう寝込むことはよくあった。

塔子は娘の相手をしながら午後を過ごした。

テレビでは、いよいよ台風は最接近したと告げている。荒れ狂うような水のしぶきが窓にぶつか



るのを見ていたら疲れてしまったのでカーテンは閉じていた。

カーテンは生成色の無地のもののだが、不思議なことに曇った日にカーテンを閉ざすと淡く発光した。生地が赤味がかかった要素がこういう日には引き立つのだろうか、実際には雲の向こうに隠れた太陽のわずかな熱が届いているのか、部屋はうっすらと蜜の色に染まった。

夕方が近き、拓也が寝室からあわただしく出てきた。

「大変だ」

「どうしたの？」

拓也は無言でカーテンを開いた。

窓の外には不思議な光景が広がっていた。

一面、泥水の湖のようだった。流れのある、広大な湖だ。

「大雨で増水して水が溢れた」

対岸の、野球とサッカー場のある広大な河川敷が完全に水没していた。

そして対岸の水際に並んでいたブルーシートの小屋はきれいに舐め尽くされたように跡形もなかった。それらは水の下なのか、もしくは水が運んでしまったのか、確かめようもない。小屋に住んでいた人たちはどうしたのだろうか？ 小屋と一緒に消えてしまったのだろうか。

「河川敷の公園は水浸しだけど、なんだ、こちら側の土手を越えて水が入ってきているわけじゃないのか。まだずいぶん水嵩は大丈夫そうだよ。それにスーパー堤防は地下から決壊しないために作られているから大丈夫だよ」

拓也はほっとしたように言った。ニュースを見た友人から君のうちのマンションは大丈夫なのかと電話があつて目が覚めたらしい。



拓也はようやくソファ―に腰をおろして朝刊を広げはじめた。

「お茶でも飲もうよ」

そう催促されても塔子は窓際を離れられない。

目をこらすようにして探した。

正面の小屋に棲む、あの男はどうなってしまったのだろうか。昨日ダストルームに侵入して警察に連行されたはずのあの男は、警察署にまだいるのだろうか。それともたいしたお咎めはなくすぐに釈放されたのか。だとしたら、ほかにねぐらを探す余裕もなく、あの小屋に帰ったのではないか。拓也がテレビをつけた。

「ちようどニュースで増水のことやってるよ」

言われてテレビをのぞき込むと、目の前の風景と同じ色の大量の水が画面に溢れていた。

「関東地方に接近した台風六号は依然勢力を保ったまま進路を東に進んでいます。それに伴う暴風雨でT川が増水して流域に被害をもたらしています。男が一人流されて、中洲の茂みにつかまっているようです。レスキュー隊が救助を試みていますが、強風のためヘリコプターは出動できません」

ロングの画像が、徐々にズームされていく。

荒れ狂う川の中程、中洲に一人の男が写る。

黒っぽい洋服は濡れてずっしりと重たげで、髪は頬にはりっついていて、日に焼けて赤銅色の皮膚に鋭く彫られたような目が静かに見開かれている。

「あの男だわ」

塔子は呟いていた。

「あの男？」

同じくテレビを見ていた拓也が不思議そうに繰り返す。

「そう、うちの真向かいに棲んでいて、毎朝、川を眺めながらコーヒーを飲んでいた男だわ」

「顔を知っているの？」

顔は知っているような気がした。

でも、具体的にハンサムであるとか、二重瞼であるとか、そういう情報は彼の真実をなにも物語っていない。でも、あれは間違いなくあの男だという確信が、粘土がかたまるように塔子の喉もとをしめつけてゆく。

ヘルメットをつけたテレビリポーターが、風に負けないように声をはりあげる。そのヒステリックな声は男には届かない。男は静けさそのもののように落ち着いている。目を見開いて、全てを凝視している。あんな目でも世界を見ていたら、きつととても疲れてしまうだろう。

わたしは彼を休ませてあげたかった。

塔子が祈ったとき、川は吼えるように渦巻いて、なにかにつかまっていた男の手が離れた。あつという間に濁流に飲まれて姿は見えなくなる。

リポーターは絶叫している。

拓也は「いやだねえ」と言いながらテレビをパチンと消す。

塔子はまた急いで窓の外を見る。

男はもつと上流にいたのだらう。きつとうちの家の前を流されてゆく。

さようなら、さようなら。穏やかに暮らしてください…。

目を覚ますと、たちこめる霧の中にいる。

川の吐息のような霧は、静かに這い上がってきてやさしくまとわりつく。

霧にうながされるようにして塔子は目を覚ます。そんなふうにしてここで生きてゆく。

生きているということの連なりが、起き抜けの眼の裏に透明な光の航跡となって伸びてゆく。

川そのもののように、川に伴走するように、つかず離れず、伸びてゆくのだ。(完)